



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ステイトとネイション (8) : 近代国民国家と世界経済の政治経済学
Author(s)	佐々木, 隆生; Sasaki, Takao
Description	ナショナリズム研究は、ネイションが近代的であるのか自然的であるのかをめぐって分かれてきた。ネイションを生み出すナショナル・アイデンティティーは、一方では近代的であり、ステイトとしての国家と産業的市場社会の産物である。だが、他方、ナショナル・アイデンティティーは神話・価値・象徴・歴史的記憶などからなるシンボル複合体であり、それゆえに近代社会の中で歴史的に多くの変容・変化を遂げるにもかかわらず、シンボル複合体の伝達可能性と存在拘束性、それが「動かない歴史」と結合して生じる惰性、それが「起源」への遡行と関連することなどから、自然的で本源的であるように意識される。ナショナル・アイデンティティーはそのように両面をもつヤヌスに他ならない。
Citation	経済学研究, 54(2), 1-28
Issue Date	2004-09-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5254
Type	departmental bulletin paper
File Information	ES_v54(2)_01.pdf



ステイトとネイション(8)

——近代国民国家と世界経済の政治経済学——

佐々木 隆 生

目 次

はじめに

第Ⅰ部 リヴァイアサンと市民社会

第Ⅱ部 ジクラトの崩壊の後に

§ 1. ネイションのプロブレマティーク

§ 2. ネイションという迷路(以上, 前号)

§ 3. ナショナル・アイデンティティーの近代性

ナショナル・アイデンティティーとステイト
産業社会とナショナル・アイデンティティー

§ 4. ナショナル・アイデンティティーの本源的・
自然的性格

ヤヌスの謎とシンボル体系への接近

ナショナルなシンボル体系とアイデンティティー

シンボル複合体の持続性と自然性

変化・変容を媒介とする持続と継承がもたら
す拘束性

動かない歴史と生活感覚

アイデンティティーと起源をめぐる遡行(以
上, 本号)

§ 5. ネイションとアイデンティティー・ポリティッ
クス

第Ⅲ部 世界経済とステイト・システムの浸食

§ 3. ナショナル・アイデンティティーの近代性

ナショナル・アイデンティティーとステイト

ナショナル・アイデンティティーの謎を解くときに何よりもはじめに踏まなければならないのは、ネイションとナショナル・アイデンティティーがまぎれもなく近代の性格を有していることを明瞭に認識することである。

ネイションとナショナル・アイデンティティーの近代的性格は、既に述べたネイションの語義の史的変遷から窺うことができようし、またルナン、コーンに始まるネイションとナショナリズムに関する研究の基本的な成果はそれを明らかにしたことにあったといつてよい。

だが、近代性について確固とした理解が確立しているわけではない。何よりも、ネイションとナショナル・アイデンティティーの近代的性

格に関しての理解の相違は、ネイションとステイトのかかわりの理解に決定的に依存している。

多少なりともナショナリズムを肯定する立場は、右か左を問わず、ステイトとは別個にナショナルな共同体が「自然」に存在するという論理に依存する。近代社会の手垢に染まる以前から自然に存在してきたネイションと、「武力」「権力」や「政治的社会関係」によって形成されるステイトを区別し、その上でネイションが固有のステイトを確立し、ステイトがネイションの利益に従うべきであると主張してきた。こうして、民族共同体なり国民共同体としてのネイションが自由な自己決定をもって固有の国家を確立するという政治的教義が引き出される。あるいは、ルソー的な国家とフィヒテ的なネイションが結合させられてきた。たとえば、前にも見たように¹⁾、孫文は、「民族とは自然力でつくら

1) 前稿「§ 2. ネイションという迷路」, p.31.

れたものであり、国家は武力でつくられたものである」と述べ²⁾、また「ある団体について、それが王道という自然力が結合してできたものなら民族であり、霸道という人為力で結合してできたものなら国家だ、ということになる」と主張した³⁾。戦前に近衛文麿に近く、戦中には「オールド・リベラリズム」の系譜にあった矢部貞治は、「民族は自然的に生成した存在であって、国家権力によって組織化されている『国民』とは別物である⁴⁾」と言う。

アンソニー・D・スミスの近代主義批判は、そのような立場に接近するかのように見える。彼は、前に述べたように⁵⁾、ナショナル・アイデンティティーの特徴を、歴史上の故国、共通の神話と歴史的記憶、共通の大衆的文化、共通の権利と義務、移動可能性を伴う共通の経済という5点に求めるとともに、「このようにナショナル・アイデンティティーを定義すれば、それが国家にかかわるどんな概念とも明確に異なっていることもわかるだろう」と述べ、国家は公的諸制度に関連するのに対してネイションは文化的・政治的紐帯を意味すると指摘している⁶⁾。そして、そのような文化的・政治的紐帯はエスニック共同体を母体として誕生する、と言う。

ナショナル・アイデンティティーがエスニック共同体のアイデンティティーを基礎として誕生し、したがって直接に国家によって人為的に創造されるものでないということ自体には一定の根拠がある。ホブズボームでさえ「大衆のプロト・ナショナリズム」の強固さを指摘している⁷⁾。しかも、現実に種々のナショナル・アイデンティティーあるいはエスニック・アイデンティティーの境界と国家の境界は必ずしも一致

するものではない。というよりも一致する例は極めて少ない。かくして、ステイトとしての国家とネイションとは別個の起源をもつかのように見える。だが、果たしてそうであろうか。既にベネディクト・アンダーソン (1983) などが本稿よりもはるかに洗練された叙述をもってナショナル・アイデンティティーとナショナリズムの近代的性格を示しているが、あらためてそのことを概観しておこう。

何よりもまず、そもそも政治的意味でのナショナリズムがステイトとしての国家を前提とすることを理解しなければならない。権力を集中・系列化したところのステイト、唯一のジッペとしてのステイトの登場が、ネイションを基礎とする国家形成をめざすイデオロギーと運動を生みだしてきたのであって、その逆ではない⁸⁾。無論、種々のエスニックな共同体に基づく統治・支配システムや政治社会は社会の成立とともに存在してきた。だが、それらはナショナリズムというイデオロギーや政治運動の基盤上に形成されたものではなく、また権力を集中・系列化したステイトとしての国家でもなかった。漢民族の帝国であろうとメソポタミアやエジプト、イスラエルの王国、ギリシャの諸国家、ローマ帝国、そして中世ヨーロッパの諸王国であろうとそうである。

イデオロギーと政治運動としてのナショナリズムは、明らかにステイトとしての国家をネイションの基盤上に形成・確立・強化しようとするものに他ならない。コーンやスミスの二分法にしたがえば、エスニックな共同体観念からナショナル・アイデンティティーを発展させ、独立なり統一という形態でのネイション・ステイトを確立しようとしたドイツ、イタリア、そし

2) 孫文 (1957[1930]), 上巻, p.15.

3) 同上, p.16.

4) 矢部貞二 (1980[1962]) p.80, 下線部は傍点.

5) 前稿「§ 2. ネイションという迷路」, p.36.

6) Smith, A.D. (1991), p.14, (邦訳, p.40).

7) Hobsbawm (1990), の第2章 (pp.46-79, 邦訳, pp.57-102) は popular proto-nationalism を取り扱っている.

8) Hecter (2000) は、間接統治から直接統治への移行がナショナリズムを生み出したと言う。この主張は、「旧き市民社会」への洞察を欠くものの、ステイトとしての国家とそれ以前の支配・統治システムとの区別を別の方法で示しているとも言える。

て東欧の諸国にしても、いずれもそれまでの帝国・王国などの支配・統治機構が次第にステイトとしての国家に転化する中で、ネーション自らの運命を自らが選択して決定するステイトを形成しようとするイデオロギーと運動から出発したのである。

さらに、ステイトがネーションとナショナルリズムの前提であるばかりでなく、ナショナル・アイデンティティーの形成自体に深く、しかも二重三重に関連することに注意しなければならない。「リヴァイアサンと市民社会」で述べたことに基づいて、ステイトとナショナル・アイデンティティーとの関係を概観してみよう。

第1に、社会の構成員は、権力を集中・系列化した統治・支配システムとしてのステイトがあつてはじめて一個の社会なり共同体に直接に属する無差別のネーションの一員としての意識を共有しうようになる。それは「旧き市民社会」には望んでも得られない意識に違いなかった。けだし、人々は、身分によって、また身分に応じて自己が存在する世界の広がり意識によって、したがってまた世俗的に直接に忠誠を誓う対象によって、さらにラテン的なヨーロッパ全域にわたる権威によって、ステイトとしての領域国家よりはるかに小規模な、しかも複数の団体の一員として、同時にステイトよりもはるかに広い信仰世界の一員として自らを位置づけたからである。

さらに、「旧き市民社会」が属人的編成をもっていたことにも注意しなければならない。人々の帰属意識と忠誠は、主権的領域国家という抽象的存在ではなく、人々の職業・身分・血縁と結びついた具体的な共同体なり、領主やジッペの主人にあつた。このような意識のありかたは、支配領域を婚資とする結婚をヨーロッパ大で行った王侯・貴族にも、おそらくはドイツ人意識を共有した神聖ローマ帝国の騎士たちにも、大小様々な都市を拠点に商工業を営んだブルジョアや親方たちにも、一生をその村落から離れることなく一人あるいは幾人かの領主の土地を耕し

ていた農民にも存在したであろう。カトリック教会であれ、カルヴァン派やルター派であれ国境を超える権威よりも国境によって画される領域内の、しかも領域内のいかなる共同体や主人の命令や法よりも国家の権威と法に従うという国制 (constitution) が形成されなかったとしたならば、このような旧き意識のありかたは変化しなかったであろう。

さらに、前に述べたことだが⁹⁾、次のことも忘れてはならない。無差別な市民からなる社会に相対する国家は、権力資源を社会から調達するがゆえに、統一した市場を制度的に創造・構築し、貨幣制度を定め、種々の公共財を供給し、対外経済政策を決定する。マルクスは、資本の本源的蓄積が「自己労働に基づく所有」の結果として自然に生じるものではなく、国家の関与によってなされることを明らかにしたが¹⁰⁾、国家と市場社会は分裂するとともに、相対するのであつて、国家なしに「自由な市場」は存在しない。その意味では、国家という装置なしに資本主義的生産様式の支配はありえないのである。国家は、国民的市場と国民的経済社会の枠組みを形成・維持し、しかも領域と人口の管理によって国民的経済社会に一定の有界性を纏わせる。このような国民的市場社会、国民的経済社会が形成されることによって、社会の人々は政治的に与えられた国民的空間を自身の生活空間として実感しうようになる。移動の自由が国内旅券の廃止などによって実現し、通行税なども姿を消し、遠隔地間の交通と交換の自由な空間が生まれ、それ以前の共同体や都市の壁を越えた財とサービスなどの諸商品、資本、人間の交流が形成され、ひいては商業的社会によって創造されるナショナルな文化消費の可能性が生まれる。政治的にも経済的にもネーションという観

9) 「第1部 リヴァイアサンと市民社会」の「§4. 市場社会としての市民社会と国家」を参照されたい。

10) Marx (1966[1867]), pp.741-791 (邦訳, pp.932-996) の「いわゆる本源的蓄積」を参照されたい。

念はステイトとしての国家によって土台と枠組みを与えられてはじめて生まれる。

このように言うと、「ステイトとしての国家が近代的であるにしても、ネイションなりナショナル・アイデンティティーはエスニックな共同体とともに旧く、また由緒正しいものではないか」という疑問が生じるかもしれない。だが、そうした疑問はナショナル・アイデンティティーとエスニック共同体がもつ象徴・神話・観念などの混同から生じる錯覚に過ぎない。エスニック共同体がもつアイデンティティーとナショナル・アイデンティティーの距離は相当に大きい。エスニック共同体固有の超越的一神教を基盤とし、ヤハウェとの契約を中心とするエスニック・アイデンティティーに基づいた王国を建設し、さらにそのアイデンティティーを守ろうとして衰亡の危機を経験した古代イスラエルにおいてさえ、現在のイスラエル建国に結びついたようなナショナル・アイデンティティーを人々が等しく共有していたわけではない。古代から独立した統治空間を連続させてきた日本についても同じことが言えるであろう。外国に、殊に西欧のネイション・ステイトの軍勢力や文化に直面する中ではじめて武士や知識人の中に「国体」が意識されるようになり、庶民に「国民」としての意識が生まれたのは明治以降と言わねばなるまい。843年にヴェルダン条約をもってカロリンガーの帝国が分裂して以来ドイツ語系の言語支配地域を基盤とした王国が存在し、神聖ローマ帝国期の貴族・騎士などの上層にはドイツ人というアイデンティティーがあったにせよ、ドイツ国民というナショナル・アイデンティティーをもつ共同体が形成されたのは19世紀に下るのであり、しかもなお普仏戦争後に誕生したドイツはオランダはもちろんのこと、オーストリーをも除く領域をもって国民国家となったのである。いや、それどころか、宮廷自体、ナショナルと言えようなものではなかった。ベネディクト・アンダーソンが指摘するように、王や宮廷は「国民国家」形成の後を追いかけてナシ

ナルな服装を纏っていったのである¹¹⁾。王や宮廷はナショナルな秩序よりも身分制的秩序に慣れ親しんできたのであり、「外国語」や「外国人」の存在は宮廷では珍しいこととは言えなかったのである。

繰り返して言うが、社会上層と下層との間の文化的亀裂、殊に下層社会の間に存在した地域、職業・身分をはじめとする種々の文化的隔絶は大きく、上層と下層が一体となるアイデンティティーをもつようなエスニック共同体はネイションとして語られる空間よりはるかに小さかったからである。エスニック共同体のアイデンティティーがその後のナショナル・アイデンティティーの素材となったことから、今日あるようなアイデンティティーが古代・中世から存在したかのように思い込んでほなるまい。

第2に、権力を集中・系列化した国家は、市場と並んで近代社会を特徴付ける行政機構や軍隊、体系的裁判制度、警察制度、教育制度、福祉制度などの「組織」を生み出した。それこそは、武装した自由人から構成される「旧き市民社会」と国家を分かち、マックス・ヴェーバーをして官僚制的「装置 Apparat」と表現せしめた機構¹²⁾を本質的に含むものであった。そうした組織は、訓練され、専門的知識を有し、得られた情報を専門的知識に基づいて解釈・判断し、適切な指針を「合理的」に策定したのであり、「組織」内部に、あるいは外部の社会全体に情報を有効に伝達する一群の人々、それまでの宗教的知識人とは異なる知識人が存在することを必要とした。無論のこと、そのような知識人誕生の要請は、それまでの神学教育とは別の高等教育制度に基礎を置く文化システムを生み出した。絶対王政期には、しばしば読み書き能力を欠いた中世盛期までの帯剣貴族に代わって、法服貴族が行政を担うようになる。ラテン語で

11) Anderson (1983), pp.80-86, (邦訳, pp.146-156).

12) Weber (1976 [1921-22]), pp. 548-550.

はなくフランス語やドイツ語などの地方語が文語の機能を果たすようになったのもこの過程に密着している。ラテン語やローマン・カトリックの世界市民的文化とは異なるナショナルなハイ・カルチャー (high culture, 高位文化) が形成されたのである¹³⁾。

フランスとイギリスでは絶対王政期に今日「国民文学」と言われているものが形成される。1539年のヴィレル・コトレ王令 (Ordonnance de Villers-Cotterets) によってイル・ド・フランスの言語が公用語とされた後、国語としてのフランス語の確立を目的として1635年にアカデミー・フランセーズの設立が認可され、辞典や文法書が刊行されるに至ったこと、コルネイユ、ラシーヌ、モリエールらによってフランス古典戯曲が生み出されたこと、16世紀から17世紀にかけてのシェイクスピアを中心としたエリザベス朝文学の開花とそれに続く1611年の欽定英訳聖書の成立、そしてそれらが英語に与えた影響などを一瞥すれば十分であろう。そのような過程は、後に多くの国々において再現されていった。ネイションの形成と「国語」「国民文学」の形成は密接に関連しているのである。こうした知識人とナショナルなハイ・カルチャーが生まれえない状態では、ナショナル・アイデンティティーを形成する諸要素は生み出されなかったであろう。

新しいタイプの知識人によるハイ・カルチャーの形成は、さらに国家機構の整備の中で、大衆のレベルにまでナショナルな文化とアイデンティティーをもたらしていく。姜尚中が着目したように¹⁴⁾、マックス・ヴェーバーが指摘した合理性¹⁵⁾、そしてフーコー (Foucault, M) が着目

した規律化¹⁶⁾は権力の確立と維持にとって欠かせないものであった。軍隊と学校は権力によるナショナルな文化の大衆への浸透に決定的な役割を果たしていった。吉田裕は、言語の標準化、身体や生活の規律化、文明開化などなくして近代的な帝国陸海軍の創出は無く、またそれらが在郷軍人会や学校教育を通じて軍を越えて村落の生活にまで浸透していったことを指摘している¹⁷⁾。学校教育が社会の規律化と文明化を通じてナショナルな文化を生み出す基礎を、つまり国民一般のハイ・カルチャー受容能力を作り出していったのである。

無論のこと、このような文化受容能力、ひいては文化創造能力の国民化は「規律化」を通じた権力支配の維持のみに奉仕したわけではなかった。文化受容能力の国民化は一方では支配的文化や権力を批判する知的能力を国民に与え、また他方ではナショナルな享楽を共有する力を国民に与えもした。しばしば「規律化」が重視されるが、「享楽の共有」がもつ意義も看過すべきではない。旧くは大衆芸能、「立川文庫」に代表される読み物や童謡、そして映画などが、新しくはテレビなどマス・メディアを通じる種々のプログラムがその時代のナショナルな心情形成を大きく左右してきたことは否めない。それらはステイトとしての国家から無縁に自生的に生まれたのではなく、国家が用意した装置の中で育ったのである¹⁸⁾。そして、政府は、このナショナルな享楽共有システムを、一方では監視し、他方では利用する。それは、あるときは政府批判や政府に否定的な価値の流布をもたらすが、国民的メンタリティーを育み、政府の世論操作を容易にもする。国民的英雄の美化と神話化は教科書のような公認の文化装置の範囲を超

13) Gellner (1983) は、ネイションの特質としてハイ・カルチャーの普及を示している。だが、ステイトとしての国家よりも産業社会がそれに及ぼした効果に焦点を当てている。

14) 姜尚中 (1996), 「第1章 規律と支配する知 ヴェーバー・フーコー・サイド」を参照されたい。

15) Weber, *op. cit.* pp.584-587 (邦訳, pp.135-141).

16) Foucault (1975).

17) 吉田裕 (2002).

18) 知識人が生み出すイデオロギーとは別個に、大衆の中にあるナショナル・アイデンティティーの在り方を探ったものに吉本隆明 (1964) がある。

える大衆的享楽空間の中で最も有効に作用するようになるのである。

「規律化」と「享楽の共有」を通して、一種のナショナルな文化的共同体が生まれ、集団的な価値選択が行われる。「規律化」の要請がすぐれて近代社会に内在することはすでに述べたが、国家は、単なる権力の集中装置、無性格・没価値の機構ではない。前にも指摘したように¹⁹⁾、「旧き市民社会」の崩壊にも伴い、また唯一のジッペとしての地位を確立する上からも、国家は公共善を規定する主体として現われ、同時に社会の安定的支配のためにも、また国家目的に人々を有効に動員するためにも、人々を精神的・文化的に統合することを追及する。イングランドにおける英国国教会の設立とフランスにおけるナントの勅令 (l'Édit de Nantes) なしに、両国の国家としての確立は困難であったに違いない。神学の外側で新しく誕生した知識人たちは精神的・文化的統合を主導する。国旗や国歌が制定され、古来由緒正しく存在したかのように種々の儀式が整え定められ、ネイションの祖先以来の伝統と栄光あるいは悲劇を象徴する建造物や記念碑が建立され、あるいはフランス革命後に見られたように地方の祭りが国民的祭りとして位置づけられ、明治維新後のように地方の神々は伊勢神宮を頂点とする神社神道の体系に組み込まれ、またネイションを動員する祝典、集会、競技大会などが開催される。公教育の中で英雄の物語が意識的にとりあげられ、それとともに固有の「歴史観」が流布されるようになり、国民的な統合が追求される。ホブズボームらが「創られた伝統 the invention of tradition」として探求した側面²⁰⁾は確実に存在してきたのである。

社会の精神的統合は、権力の構成と配分や公共善の選択をめぐる社会の中での闘争の止揚な

しには実現しえない。言い換えれば、ステイトとしての国家が上からの精神的統合を企図するときに、社会の中での、新しい政治社会の中での国民的な価値選択の問題が生じる。政治的指導者による世論の獲得が必要とされる。国家に相対する市民社会は、そのような価値選択をめぐる言説・象徴・神話の闘争空間となる。殊に、国民的議会の誕生は政治社会が国民的であることを宿命づける。選挙や種々の政治的活動は、それまでの狭い共同体や教区から広い政治的空間の中で、しかし国民的なコードと限界によって枠付けられた空間の中で行われるようになる。国家と向き合う市民社会で政治選択を行う人民は、かつての自由人、あるいは市民をはるかにこえて、広く「大衆」を含むものとなり、彼らを政治的に動員するためには、旧来の政治的手法を超える手法、つまり大衆を含む世論を有効に形成する手法が必要となる²¹⁾。世論が形成される公共的なイメージと言説の空間は、宮廷の片隅からサロンへ、さらに広場に、そして出版物やマス・メディアなどによってつながれる情報空間へと広がっていく。国家は、いやおうなしに人々の宿命を直接・間接に左右する存在となるとともに、人々の政治的思考と行動の直接の対象となるのである。こうして、上からの伝統、神話、そして象徴の創造と社会の中での価値選択と交錯する。

さらに注目すべきは、これまで述べたことから、無差別な国民が自らの自由意志に基づいて政治社会での決定に参加することへの希求が生まれ、差別された人民と「自由な人民」の間に、差別された集団と支配的集団の間に緊張が生じる。顧みれば、ナショナル・アイデンティティーの追求とナショナルイズムの興隆は、いずれもアンシャン・レジームに代わる近代的国制の確立、帝国支配からの特定の国民国家の独立の追求と結びついている。フランス革命に続いたナショ

19) 本稿「第I部 リヴァイアサンと市民社会、§5. 政治社会としての市民社会の復権」を参照。

20) Hobsbawm & Ranger (1983).

21) この問題を取り上げたナショナルイズム論として、Mosse (1975) がある。

ナリズムの興隆は1848年における革命の国際的高揚と、20世紀はじめのナショナリズムの爆発は清、ロシア、ハプスブルク、トルコといった帝国の崩壊、そしてロシア革命がもたらした歴史的環境と結合していた。同じことは、第2次大戦後の民族独立、そしてソ連崩壊後のアイデンティティー・ポリティックスの爆発にも言える。ナショナリズムの高揚はすぐれて現代的な、しかも国際的な環境の中で生まれてきたのである。

第3に、主権的領域国家は、国民を管理し、国民的諸制度と慣習を規定し、したがって独自の有界性をもつ社会を作り上げて自己を他者と区別しつつ、国家理性にしたがって他者との仮借ない国際関係を取り結ぶ主体となってきた。どの階級や地域などがその利益を多く手中にするにせよ人々の繁栄と平和を集中・系列化した権力をもって維持する唯一の平和・保護共同体、ジッペとなったのである。ひとたび外国に出た人々は、異邦人となり、自己が帰属する国家以外に保護をあてにするものは無くなる。戦争にせよ通商にせよ競技にせよ他の国家との諸関係は常に「外国人」と「自国民」を意識的に区別し、人々が所属し、帰るべき国土と国民的社会的存在の確かさを明確にする。

国民的な有界性に基づく外国との区別と外国との利益対立、さらに外敵の存在ほどナショナル・アイデンティティーとナショナリズムを促進するものはない。諸国民の互いの区別と対立の中で、「国内」や「自国」という意識が育まれ、外国に比して「自国」を特質づけるシンボルが文化から制度など種々の面で意識されるようになる。わけても、最初は君主に属し、やがて国民的常備軍として純粋に国家に属するようになる軍隊は、ホブズの国際関係からして、国民的共同体を防衛する代表者として意識されるようになる。軍の制服、独自の装備、行進・艦隊運動・編隊飛行が国民を象徴するものとして意識される。父祖の地を意味するギリシャ語から生じた郷土愛 (patriotism) は、ステイト

を枠組みとする国土と国民を対象とする祖国愛として再編され、外敵との戦いを素材に紡がれる英雄談や悲劇、そして栄光の日々の物語が神話化・象徴化されて記憶される。1775年の独立戦争でのレキシントン・コンコードでの戦いはPatriot's Day (愛国記念日) として記憶され、「ラ・マルセイユーズ」は「立て、祖国の子らよ」と歌い、戦地に赴く人々は家族と郷土、そして「祖国」を重ね合わせて戦意を確かめる。ナショナリズム昂揚の契機は、唯一のジッペとして「国民」を管理する領域的主権国家という装置なしには生まれがたいものであった。諸国民が競い合うスポーツも同様な役割を果たす。ナショナル・チームはネイションの栄光をかけて他のナショナル・チームと競い合う。栄光が国旗の掲揚や国歌の演奏によって象徴されるときに、ナショナル・チームの活躍はネイションの栄光に重ねあわされる。

このように、ステイトはナショナル・アイデンティティーの形成を規定する。ステイトなしには、ネイションの創造はありえなかったのである。そのことを改めて確認するとき、ここにナショナリズム論の中で不明確にされてきた点が浮かび上がる。「近代主義」の代表者の一人とも言えるゲルナーは、農業社会と産業社会との対比でナショナル・アイデンティティーを規定するハイ・カルチャーの形成を述べたのだが²²⁾、それはもっぱら産業社会に即して叙述された。だが、これまで見るように、ハイ・カルチャーの形成はステイトとしての国家の機能を欠いては十全なものとはならない。ゲルナーは「国家」について、「旧き市民社会」やアジアの「帝国」などを含めた支配・統治システムを指す用語法を用いているが²³⁾、そうした用語法、

22) Gellner (1983).

23) Gellner (1983), pp.3-5. 無論、ゲルナーがステイトとしての国家の機能を見ていなかったとはいえない。だが、古代国家や旧き市民社会とステイトとしての国家の区別なり、後者の独自性について言及してはいない。このような用語法

つまりステイトとしての国家と旧き市民社会や古代的統治システムを区別しない用語法とも関連して、ステイトとしての国家とネイションやナショナル・アイデンティティーとの関連を軽視あるいは看過したように思われるのである。

ゲルナーの研究指導を受け、やがてゲルナーの「近代主義」を批判するアンソニー・D・スミスについても同じことが言える。彼は、ネイションとナショナリズムの時代が近代とともに生成したことを指摘しながら、西欧において「3つの型の革命」の効果、つまり資本主義への移行という分業の分野における革命による統一的経済システムの形成、軍事や行政における管理方法の革命による国家機構の飛躍的發展、文化・教育革命による主権国家の下での文化共同体の形成、これらが中央集権的で文化的に同質な国家を構築し、そこから領域的な、つまり西欧的なネイションが生まれたと述べている²⁴⁾。これら3つの型の革命は、これまでの考察から明らかなように、スミスの言うように「不連続」であったにせよ、ステイトとしての国家の形成・確立を構成するに違いない。とすれば、スミスがナショナル・アイデンティティーの要素として掲げたものは国家と関係がないのではなく、強い関係を有するという結論が導かれる。この点で、注意すべきは、スミスがステイトとしての国家を一貫して「中央集権的国家」や「領域国家」と述べ、国家一般に、ゲルナーと同じように、ステイトとは区別される「旧き市民社会」などの支配・統治システムを含めていることである²⁵⁾。

は社会学的アプローチに限らず、歴史学、政治学と法制史学以外のナショナリズム論に一般的であるとも言える。前に言及した Hecther (2000) もその例外ではない。言い換えれば、ステイトとしての国家と他の支配・統治システムの区別が不明瞭であるからこそ、間接統治と直接統治の区分に焦点があてられたと言えるやもしれない。

24) Smith, A.D. (1986), pp.130-134 (邦訳, pp.154-170).

25) *Ibid.* pp.129-152 (邦訳, pp.153-180) を参照。

こうしてみれば、ナショナリズム論の言説にみられるゲルナーとスミスの対立は、両者がともにステイトとしての国家の意味を明瞭に把握していなかった点から生じたとも言えるのではないであろうか。その意味では、ナショナリズム研究と国家研究の総合が必要とされているのである。

産業社会とナショナル・アイデンティティー

ステイトとしての国家の形成・確立がネイションの生誕に不可欠の契機であるとしても、ただちにナショナル・アイデンティティーが形成されるものではない。そのことは、歴史的にはステイトの形成・確立の時代とナショナリズムの形成・確立の時代のずれにもよく現われている。旧き市民社会に代わって登場した領域国家の主権は、国民ではなく君主に属したからである。ナショナリズムは、国家が君主に所属するのではなく、君主が国家に所属する時代にはじめて支配的な政治力をもつようになる。このことを明確に示すのは、フランス革命の中でのナショナリズムの興隆とともに、19世紀後半に至ってナショナリズムがフランス国境を越えてヨーロッパ全体の政治的変動に大きな影響を及ぼすこととなった点である。

フランス革命がナショナリズムの源流をなすとしても、フランス革命の直接的影響はウィーン体制によって一度は押し戻される。だが、それは再び1848年革命に象徴される政治変動において復活し、その中で、コシュート (Kossuth, L) やマッツィーニ (Mazzini, G) に代表されるナショナリズムがハプスブルグ帝国の中に生成し、さらにロシア、トルコなど旧帝国の動揺と重なってホブズボームの言う新しい型のナショナリズムが生まれていった。ホブズボームは、フランス革命から「民族自決権」観念が生まれたという神話を批判し、さらに1880年以後には、それまでとは異なる様相のナショナリズムが生じた指摘しつつ、「規模の原則」つまり

19世紀半ばには常識のように考えられていた「大国民」なり「生存能力」に対応した国民国家形成原則が放棄されたこと、その結果エスニシティと言語がネーションであることの決定的基準となっていたこと、そして遂に「ナショナリズム」という言葉が生まれたことを挙げている²⁶⁾。イデオロギーとしてのナショナリズムの興隆は、ステイトとしての国家の形成を前提とするにしても、他の要因を契機とすることが明らかとなってくるであろう。

19世紀後半にナショナリズムがヨーロッパに普及していったには理由がある。その1つが、既に述べたステイトとしての国家の確立とそれに関連した政治社会の変化であったことは疑いえない。フランス革命の後に生まれたウィーン体制に象徴される君主による支配維持の試みに対抗する1830年と1848年の革命—大陸ヨーロッパ全土を揺るがした政治的変動—は、部分的にしか成功しなかったもののヨーロッパの政治的構造を根底から変化させていった。これに前後して、相次いで農地改革と農奴解放、営業の自由の導入が試みられ、国内旅券は廃止され社会的流動性は高まり、国制、政府・官僚機構、軍隊での改革がなされた。自由主義と王制の対立は過去のものとなり、ブルジョアと旧支配層の妥協と連携が生まれ、自由主義的思想は、これまでの反対者であった王党派思想とは異なる反対者である社会主義を生み出しながら、支配的イデオロギーとしての地歩を固めた。1848年の革命は、フランス革命からはじまった政治的変動を普遍化する結果をもたらし、君主や土地貴族による支配の独占を終わらせ、ステイトとしての国家の純化を一層進めたのである。それとともに、国家に相対する政治社会が形成され、ブルジョアの政党ばかりでなく、農民の政党や社会主義政党が生まれた。君主の所有物としての国家からのステイトの解放とそれに対応する

政治社会の形成は、当然のことながら、ナショナルな社会の創造と想像をもたらす大きな契機となった。また、自由主義的政治社会の形成は、いやおうなしに十分な自己決定権をもたない住民集団の抵抗と反発を惹起する。ハプスブルク支配に対抗するイタリアやハンガリーのナショナリズムが1848年革命を契機に登場したのは自然であった。

だが、それだけではなかった。ナポレオン戦争後にも引き続いて展開したイギリスの技術革新とそのヨーロッパへの波及によってヨーロッパ産業社会が誕生し、そこからネーションが実質的に創造され、容易に想像しうるものともなったのである。そのことなしには、絶対王政期に形成されたハイ・カルチャーの掌握力は限られたものにしかならなかったであろう。産業社会がゲルナーの言うハイ・カルチャーによる文化的境界の創造なり、ベネディクト・アンダーソンの言う「想像の共同体²⁷⁾」をもたらす経路は単純ではなかったが、しかし確実にそれらをもたらした。

第1に、産業社会は分業を発展させ、国内市場の統一を生み出し、機械制工業に基づく均質的な消費社会を形成し、一個の経済社会に人々が帰属するという意識をもたらす。19世紀の産業社会は、人々が身に纏うものを次々と注文生産品から店頭で購入する商品へと変化させていった。また、社会的分業の発展を支える共通空間、情報を共有し交換し合う空間を、馬車や運河に代わる鉄道輸送の登場、高速印刷機の導入による新聞や出版物の発行、電信網の形成などによって飛躍的に拡大・深化させた。そのような空間の創造は、ナショナルな神話、価値、象徴、記憶、文化などを生み出す上で決定的な役割を果たした。約100マイル離れたロンドンとバーミンガムは、ターンパイクを時速8から10マイル程度の「快速」の馬車でも1日以上かかる遠距離であったが、時速30マイルを超

26) Hobsbawm (1990), pp.101-102 (邦訳, pp.130-132).

27) Anderson (1983).

える速度で走る鉄道はこの区間を数時間で結びつけ、しかも運河に匹敵する重量や体積の物資を容易に輸送することを可能にした。そして、1850年にはすでに6,000マイルの鉄道が敷設されたほど急速に鉄道網は拡張したのである。また、18世紀末にジョン・ウォルター (Walter, J.) によって政界や外国に関するニュースや上流社会のスキャンダル、それに広告を掲載した日刊新聞が発行されていたが、彼の息子は19世紀はじめにコスト低減と高速印刷を可能にするケーニッヒ印刷機を導入して「ザ・タイムズ」を刊行した。1時間に12人以上の職人によって300枚から400枚しか印刷できなかった紙面はわずか2人の職人によってそれ以上印刷されるようになり、19世紀後半に発明された輪転機は1時間に片面数千枚の紙面印刷を可能としていった。空間としての国民的社会が現実の存在となったのである。

第2に、産業社会は、近代的教育システムを生み出す強力な推進力となった。既に、ステイトと市場の台頭に伴う旧き社会の崩壊が旧き精神生活の動揺を惹起し、ポリツアイ条例やラント法に見られる道徳的領域へのステイトの介入が生まれることについて述べたが²⁸⁾、そうしたこともあってプロイセンでは18世紀から義務教育が導入されはじめていた。義務教育の導入は、産業社会が旧き共同体の解体と児童労働を厭わない資本主義的生産に基づく道徳と労働力の破壊・損耗をもたらすにつれて一層促進されることになる。アダム・スミスやマルサス、J. S. ミルなどの古典派経済学者たちは、国家主導の教育を明らかに嫌いなながらも初等教育への政府の関与を不可欠とみなしていた²⁹⁾。19世紀後半から状況はさらに一歩進む。中産階級が教育を受けることによって社会の指導的人材を再生産するシステムが中等教育や高等教育の拡大

によって生まれるとともに、一方では、イノベーションとその普及が技術教育の必要をもたらし、他方では、生産性の上昇が次第に賃金上昇をもたらすことにより労働者階級の子弟が学校に入る余裕と刺激が生まれていった。

このようにして、コンドルセにみられる啓蒙主義的人権思想と結びついた教育への民主主義的・自由主義的観念の発展とも関連しながら近代的教育体系、つまり公教育を基本とする義務教育、教育を通じる技術の取得、高等教育によるエリートの意識的再生産などの体系が生まれるが、それが、ナショナル・アイデンティティーの醸成の土壌をなしたことはステイトとの関連で既に述べたとおりである。殊に国民的な規模でなされる義務教育は地方言語や地方的共同体への忠誠を弱め、国民的言語の普及を実現し、ナショナルな神話、象徴、価値、歴史的記憶を社会の隅々まで刷り込む試みを組織的に実行していった。「ナショナリズムの最も偉大な宣教師は学校教師であった³⁰⁾」というA. J. P. テイラーの言葉は、そうした学校教育の役割をよく表している。ベネディクト・アンダーソンの言う出版語による国民意識の基礎形成³¹⁾は、このような世俗的学校の普遍化あるいは義務教育制度の展開なしにはありえず、また民衆の深部に至るまでのナショナル・アイデンティティーの浸透は到底ありえなかったであろう。そして、それほどまでに学校が普遍化するには産業的発展が必要ともされたのである。

第3に、産業社会が市場の普遍性と結びついた創造力と破壊力をもってナショナル・アイデンティティーに与えた効果も看過しえない。国家の形成・確立がラテン的キリスト教世界の普遍性を切り裂いて諸国家への世界の分裂をもたらしたのに対して、市場社会の土壌から生まれた産業社会は分業と交換の体系を、地域を越えた空間に生み出し、さらに国家をはるかに超え

28) 「§ 5. 政治社会としての市民社会の復権」の「公共善の範囲と内容」を参照。

29) Taylor (1972), Sanderson (1992) などを参照。

30) Taylor (1995 [1993]), p.204.

31) Anderson (1983), pp.41-49 (邦訳, pp.72-84).

る空間へと拡大した。鉄道網はイングランドの国内諸地域を結び付けた次にはヨーロッパ大陸を覆い、アメリカ、ラテン・アメリカ、インドでの諸地域の孤立を破り、電信技術は遠隔地間での瞬時での通信を可能にした。このような産業社会の拡張力は、古い村落や共同体の生活と生産の諸様式を破壊し、同時に渓谷や山岳によって隔てられた中央との結合・交換、外国製品と外国市場依存の生活をもたらした。このような破壊と解体、結合と交換は、人々の意識の転換を喚起せずにはおかない。

産業社会が生み出す破壊的な統合効果は複雑な様相を纏っている。一方では、人々は自分の生地や職業、身分などを超えた世界の中で普遍的な人間として存在することを意識するようになり、他方では、他の地方や都市、さらに外国の人々との接触、つまり自分とは異なる文化や価値、伝統、記憶をもつ人々との接触によって、新たな環境との関係で自己のアイデンティティを意識、あるいは再定義するようになる。そこから一面では、人権や国家についての普遍的思想がここかしこに生まれることになるが、他面では抑圧されたもの、失われたものへの郷愁、自らが自然で永遠のものとして意識していたものを圧迫し、解体し、破壊するものとの緊張などが生まれる。

産業社会が発展し、資本主義的世界市場が形成されていった19世紀後半にこのような力が大きく作用したことは疑いえない。それまでの「大国民」のナショナリズムとは異なる種々のナショナリズムやヨーロッパ以外の地域でのナショナリズムがこの時期に生まれたが、その多くは人権への覚醒とともに、旧き、正統の、由緒正しい歴史と伝統の発見・再興・創造を伴っていた。フランス文化のヨーロッパに対する支配的影響と合理主義への反発をバネとして誕生したドイツのロマン主義的ナショナリズムは、このようなナショナリズム形成の先駆であった。明治中期の「国粹主義」も、ロマン主義のような反啓蒙思想とは異質の思想であったにしても、

こうした流れに関連している。「国粹主義」の提唱者であった三宅雪嶺が、一方では「仮令日本固有の風俗にても、日本特造の習慣にても、其他制度にても、国産にても今日国家の処世上に適応せざるものあらば、宜しく之を打破すべし、文明境裡に泰西諸邦と馳駆するの上に於いて、不利なるものあらば、宜しく之を擲棄すべし、何ぞ旧物に恋恋して国家千万年の大計を誤るものならんや」と述べつつ、他方で「仮令旧来の習慣を打破するも、日本在来の精神は之を保存せざるべからず、之を顕彰せざるべからず、之を助長せざるべからず、・・・言を換えて云えば、泰西の智識は之を利用するも、各自『日本人』たるの精神は之を喪亡せざるべしとすること・・・³²⁾」と述べているのは、「文明」への覚醒と緊張をよく示している。そしてここに、あるナショナリズム、たとえばロマン主義が非合理主義に向かい、三宅雪嶺や陸羯南に見るようなナショナリズムが西欧の普遍性・啓蒙主義と「国粹」に向かうことも容易に理解しうるであろう。産業社会の発展なり「近代化」は、旧きアイデンティティを破壊し、あるいは変化・変容させるであろうが、ナショナル・アイデンティティを意識的に求める諸力を強めるのである。

第4に、これまで述べたことに関連して、1848年革命を境に労働者政党が生まれ、それまで王党派に対抗していたブルジョア的政治運動が急速にナショナリズムに依存していったことも忘れてはならないであろう。政治的自由の獲得の次に、労働者階級は自らの権利と地位の改革を望んだが、これに対して階級による国民の分裂とそれに基づく他の階級・階層の受ける脅威はナショナル・アイデンティティの高揚に基づく国家の維持へと向かったからである。産業社会がもたらした新しい社会の亀裂、価値の相克は、「旧き市民社会」以来の支配層に対抗するナショナリズムとは異なるナショナリズム

32) 三宅雪嶺 (1889[1975]), p.253.

を、つまり獲得されたブルジョア的自由や国家の統一などを防衛し、国内の階級対抗を他に転嫁するナショナリズムを生み出したのであった。

このように見れば、ナショナル・アイデンティティーやナショナリズムが、ステイトとしての国家と普遍的市場へのベクトルを内包する資本主義的経済社会を欠いては形成されえなかったことが明らかであり、同時にまた、前に見た変化・変容や多面性という「ナショナル・アイデンティティーの謎」が存在することも理解しうることになる。国家と産業社会の態様と構造が歴史的な変化を遂げるとき、ナショナル・アイデンティティーが国家と産業社会によって規定されるとすれば、ナショナル・アイデンティティーもまた歴史的な変化を遂げるからである。ナショナル・アイデンティティーの謎めいた性格は、ナショナル・アイデンティティーの近代性に深く結びついているのである。ルナンは、「忘却、歴史的誤謬と言ってもいい、それこそは国民創造の本質的な一因子である」と述べ、「国民の存在は日々の人民投票である」と断じた³³⁾。無論、ルナンの言う「国民投票」は、一面では個人としての市民の存在を前提とする側面を有し、市民形成の未成熟な社会では「国民投票」というよりは「上からの」国民的意識の形成が強力に展開されたとも言える。それでも、ナショナル・アイデンティティーは固定的なものではなく、絶えず環境に対応して変化・変容を遂げてきたことに変わりはない。

ナショナル・アイデンティティーが多くの変化・変容を伴うことは、ルナンの後にも探求されてきた。アンソニー・D・スミスは、ギリシャ、インド、イスラエル、イングランドのナショナル・アイデンティティーの史的展開を辿りながら、「ネイション創造はいくたびも起こり、ネイションは周期的に更新される。ネイションの創造は、絶え間ない再解釈と再発見、再構成を

ふくんでいる。それぞれの世代は、支配的な社会集団と社会制度の要求やその野心に最もうまく応えられるように、ネイションの制度と階層的秩序とを、過去の神話・記憶・価値・象徴にてらして、ふたたび作りなおさなければならない³⁴⁾」と述べた。ナショナル・アイデンティティーが、どのようなエスニックな歴史と伝統、あるいは「古層」をもつにしても、常にその時代固有の環境と条件に対応して、「忘却」と「歴史的誤謬」を伴いながら不断に変化・変容を遂げながら再生産されてきたことを看過してはならない。そのような意味では、ナショナル・アイデンティティーなりネイションとは常に同時代の産物に他ならないのである。

このようにナショナル・アイデンティティーが変化・変容を遂げながら再生産されるとすれば、「自然的」で「本源的」に見えるアイデンティティーが、揺ぎ無い単一のシンボル体系を基に形成されているのではなく、対立を含む複数のアイデンティティーが並存し、それらの間に緊張が存在することも至極当然ということになる。ネイションのシンボル体系が歴史の進展の中で多様に形成された種々のシンボルの束として存在することは、こうしてまた、ナショナル・アイデンティティーの近代性の証ともなるであろう。

§ 4. ナショナル・アイデンティティーの本源的・自然的性格

ヤヌスの謎とシンボル体系への接近

ナショナル・アイデンティティーは、まぎれもなく近代的である。だが、既に指摘したように、ネイションは「自然」なもの、言い換えれば変わることはない永遠の共同体として意識され、その前提に立った理論化の試みもなされてきた。ネイションとは、近代を象徴するステイ

33) Renan (1882), p.3 and p.10 (邦訳, p.47 及び p.62).

34) Smith, A. D. (1986), p.206 (邦訳, p.241).

トとしての国家と産業資本主義の産物という顔と万古不易の自然的存在という顔をもつヤヌスに他ならない。ナショナル・アイデンティティーが歴史的に形成される時に、同時にそのようなアイデンティティーによって規定されるネイションが自然のあるいは恒久的存在として、あるいは自然的属性を有するものとして観念される。つまり、ネイションの半面の顔は、近代以前に遡って歴史的に様々に遂げてきた変化・変容にもかかわらず、また近代のもたらす種々の普遍性の浸透と圧力にもかかわらず、常にその時々、あたかも本来的に、永遠に、自然にそうであったかのような姿と表情をもつ。ネイションとナショナリズムの研究あるいは批判は、ネイションとナショナリズムの近代性の指摘から出発したが、今日の段階では、そのような近代性と自然的・本源的性格との並存をどのように説くのかという課題を背負っている。

ナショナル・アイデンティティーのヤヌス的性格は、前節のはじめに触れたように、マックス・ウェーバー³⁵⁾から今日まで一貫して認識され、それとともにその自然的・本源的な性格はネイション形成に先行するエスニック集団との関わりで取り上げられてきた。だが、近代的なネイションにしても歴史の中から形成される限り、先行するエスニック集団の神話や歴史的記憶、そして文化を素材とすることは自明であるが、それ自体を認識してもヤヌスの謎は解けない。ナショナル・アイデンティティーの歴史的素材の存在だけでは、近代の産物としてのナショナル・アイデンティティーの本源性や自然性は説明しえないからである。問題は、ナショナリズムやナショナル・アイデンティティーの前提、基礎、素材等々としてのエスニック集団やエスニック・アイデンティティーそれ自体を肯定するか否かにではなく、そうしたことを前提にしてなお、近代の産物であり、日々の中で再生産されるナショナル・アイデンティティーに基づくネイション

が何ゆえに「自然」あるいは「本源的」な存在として受容されるようになるのかという点にあると言えるであろう。

この問題への回答は、ネイションの意識と概念、ナショナル・アイデンティティー、ナショナリズムなどの近代性を探求したような方法によっては、つまりナショナル・アイデンティティーが国家や産業的市場社会などの外的環境にどのように関連しているのかを探るような方法によっては得られない。アイデンティティーそのものがもつ構造、それがもつ固有の論理を解き明かす必要がここに生じる。

ナショナル・アイデンティティーやナショナリズムの理解は、前に指摘したようにフロイトから始まりエリクソンによって確立されるアイデンティティーへの着目とソシュール、カッシーラーなどによって追求されてきたシンボル体系の意味の認識、そしてそれらとも関連するタルコット・パーソンズの社会体系論などを継承することによって大きく進んできた。そのことをよく明らかにしているのはクリフォード・ギアツの「文化の解釈学」、特にそのナショナリズム論である³⁶⁾。

ギアツは、イデオロギーの社会的決定要因をめぐってマルクスに代表される「利益説」と知識社会学以後に主張されるようになった「緊張説」について言及する中で、「一方で（基本的にフロイト的な）パーソナリティー・システムについての洗練された概念を加え、他方で（デュルケム的な）社会システムについての、さらにはその両者の相互浸透作用の様態—パーソナル的な付加物である—についての洗練された概念を加えれば、利益説は緊張説に変化する³⁷⁾」とした上で、しかしながら緊張説にしてもイデオロギーが果たす社会心理的機能については説得力に欠いていると論じる。「象徴的定式化についてまったく初歩的な概念以上のものがほと

36) Geertz (1973).

37) Geertz (1973), p.203 (邦訳, II, p.18).

35) Weber (1976 [1921-22]), pp.242-244.

んどない」ことから、イデオロギーの原因と効果に関する「連結要素－象徴的定式化の自律的な過程－が、実質上の沈黙の内にやりすごされている³⁸⁾」というのである。つまり、「認識の『歪曲する』力を芸術が確認し、情緒主義的な意味理論の妥当性を哲学が揺るがしていたその同じときに」、社会学者は「イデオロギーの主張の意味を読みとるという問題を、要するにそれが問題であるとは考えないという形で回避してきた」のである³⁹⁾。

ギアツはこうした認識から出発し、象徴体系は社会心理的過程を組織する上での文化パターンなりプログラムであると規定し、イデオロギーの機能は政治を導く手段としての説得力あるイメージを与えて自律的な政治を可能とする点にあるとする⁴⁰⁾。そして、このような考えの延長上に、新興独立国で伝統的支配が崩壊して新しく定式化されたイデオロギーが必要となるが、それは「伝統的生活様式あるいはエッセンシャルリズム」と「時代精神あるいはエポカリズム」の緊張に直面する運命をもつと論じたのであった⁴¹⁾。無論、ギアツがここで言う伝統的生活様式あるいは「本源的紐帯 (primordial attachment)⁴²⁾」が象徴体系であることは言うまでもない。したがってエスニックなアイデンティティーが自然のように存在するというものでないことに注意を払っておこう。

シンボル体系への注目も、ギアツばかりではなく、クロフォード・ヤング (Young, C.) などに始まるシンボリック・ポリティックスの研究⁴³⁾によっても発展させられていった。アンソニー・D・スミスの研究もそうした流れの中にあると言える。したがって、ギアツとスミスの

間に相違点があるにせよ、両者の間の対立はそう大きいものとして受け取るわけにはいかない。エドワード・シルズ (Shils, E.) をとりあげてのスミスの「本源主義」批判はこうした先行研究の到達点を確認しながら、ギアツが「本源的紐帯」としたものの自体をシンボル体系として捉えることによってネイションの「自然的」あるいは「本源的」性格を批判的に把握しようとするものであった⁴⁴⁾。

上に述べたような考え方を受容してネイションやエスニシティの問題に立ち入ろうとするとき、社会学者たちは実は大きな試練に直面する。ギアツが指摘したシンボル体系探求の社会科学への導入は、社会科学の正統な方法に抵触するからである。問題は2重に存在する。第1の問題は、社会科学は、ギアツが言うように、何らかの意味での客観的世界への合理的対応として意識や制度を把握してきた。この点に関してはマルクスもウェーバーも変わりがない。第2に、社会科学は「モデル」を利用することによって経験科学として、つまり自然科学に近い「科学的scientific」な学問として発展してきた。そして、こうしたモデルを形成し、操作するときには多分に近代物理学や化学の影響の下に人間が分子や原子のように独立して合理的に行動するものと想定してきた。方法論的個人主義である。こうした2重の束縛から自己を解放しない限り、社会科学はナショナル・アイデンティティーとネイションの謎を解明しえないと言うべきであろう⁴⁵⁾。

38) *Ibid.*, p.207 (邦訳, II, pp.24-25).

39) *Ibid.*, p.209 (邦訳, II, p.27).

40) *Ibid.*, pp.218-219 (邦訳, II, pp.41-42).

41) *Ibid.*, pp.249-254 (邦訳, II, pp.100-108).

42) *Ibid.*, p.259 (邦訳, II, p.118).

43) Young (1976), またKaufman (2001) を参照されたい。

44) Smith, A. D. (1986), p.12 (邦訳, p.15).

45) 古典派、マルクス派、ケインズあるいはポスト・ケインズ派は階級を経済主体と見てきたが、新古典派にはそうした見地は無い。だが、そこから出発して経済主体を集団として取り扱う試み－機能主義的な限界をもつとはいへも生まれてきている。注目すべきものの1つに Akerlof (1984) がある。

ナショナルなシンボル体系とアイデンティティ

社会は、独立した諸個人の集合ではありえない。そうした仮象が可能なのは、無差別の多数者による交換が社会の唯一の原理であるような「市場社会」モデルか、もしくは独立な自由人によって政治社会が構成される「旧き市民社会」モデルに基づいて社会を代表させる場合であろう。だが、既に触れたように⁴⁶⁾、市場社会は国家や家族や種々の共同体、そして価格ではなく法や慣習や規則などによって行動が規制される企業や団体などを含まずには存在しえず、「旧き市民社会」にしてもまたジッペの内外における種々の契約と支配の諸関係をもって安定する。これら2つのモデルは、前者が市場の、後者が政治社会の特定の機能に焦点をあてて創案された機能的な概念モデルでしかなく、そうした機能的な概念モデルがもつ限界を本質的に抱えている。さらに言えば、市場社会モデルを例にとつて言えば、あたかも独立した諸個人が相互に交換するという形式が採用されているが、実は自由な交換があるからこそ諸個人が「独立」しうるとも言える。個人の独立や自由と社会関係についての考察は、はるかに広く深い分析を要するが、とりあえず独立した諸個人がそれぞれの意志にしたがって社会を自由に形成し、あるいはそこから離脱しうるといった観念から離れるとしよう。

諸個人は、パーソンズ的にせよハーバマスのにせよ、諸個人を相互に関係づける種々の社会体系の構成員としての具体性をもつ諸個人として存在する。諸個人は、社会の中で具体的に特定の位置をもち、固有の履歴をもつ。そうした位置や履歴から離れた抽象的個人として行動し、思考することはありえない。個別に具体的な諸個人としての人々は、職業を、その職業の中でのある地位を、あるいは他者との関係での規定

性を必ずもつ。人々は、ある会社や団体である役割を担う人物であり、父や母、妻や子であることから逃れて個人ではありえない。このような具体的社会的存在形態は抽象的な個人の規定の中では消えさるが、社会的存在であること自体は抽象的個人の規定においても消えることはない。逆に言えば、自己の意思によってかあるいは強制された結果として、社会体系から排除された個人としてしか一人の人間の完全な独立はありえないであろう。いかなる分子とも無縁の、真空中に完全に独立した原子があるとすれば、それと同じように。

社会の中でのこれら人間の相互行為は、シンボル体系なしには存在しえない。「精神の真の根本機能はすべて、単に模写するだけでなく、根源的に像（ビルト）を形成する力を内蔵するという決定的な特徴を、認識と共有している⁴⁷⁾」のであり、「精神の内在的發展において、記号の獲得はつねに客観的本質の認識を達成するための不可欠な第一歩⁴⁸⁾」であり、「言語や芸術や神話のうちに働いている意識のシンボル機能によって、意識の流れのなかからはじめて、一部分は概念的であり、一部分は直感的でもあるような性質をもった、特定の不変な根本形象が浮かび出てくる⁴⁹⁾」からである。

根源的なシンボルは言語である。言語という人間によって創造されたシンボル体系によってはじめて人間は概念を、精神的関係を手にすることができるからである。ここから、価値、宗教や神話、芸術などが生まれ、歴史が記憶される。そして、それらは、また隠喩などを媒介に形成される象徴的表現を産出する。そして、ある社会に所属する人々は、その社会に固有な諸属性として意識されるシンボル体系の共有を通じて自己がその共同体の構成員であること、異なるシンボル体系を有する他者とは異なる社会

46) 「I. リヴァイアサンと市民社会, § 4. 市場社会としての市民社会と国家」を参照。

47) Cassirer (1988 [1923]), p.8 (邦訳 [一], p.28).

48) *Ibid.*, p.21 (邦訳, 同上, p.49).

49) *Ibid.*, p.22 (邦訳, 同上, p.49-50).

的存在であることを意識するばかりでなく、その社会に所属することを自己の生き方や価値観として内面化することによって自己を確立し、その社会の中での自己の位置や役割を主体的に受容する。

また、シンボル体系は、言語がそうであるように、人々の相互関係を支配する。貨幣が自立した富の象徴となり、また交換手段として機能するのはこのことを最もよく表現している。まして、イデオロギーや政治選択は、ギアツの指摘したように、シンボル体系なくしてはありえない。ステイトと市場が相対するようになったときに、固有の政治社会が復活することについては既に述べたが、公共善をめぐる社会的葛藤はすべてシンボル体系に規定され、その中での個人は一面では「個人」として確立されながら、他面ではシンボル体系に規定された社会を構成するのである。マスコミュニケーションが社会に支配的力を及ぼすのは、それが情報を把握し操作しうるといったことにも基づくが、何よりも社会全般に及ぶシンボル体系を最もよく創造し再生産しうる地位にあることによっている。

ナショナル・アイデンティティーはこうした概観図の中に位置している。つまり、エスニックなりナショナルなアイデンティティーとは、「共同幻想」として形成されたナショナルな神話、言語、価値、象徴、記憶などのシンボル複合体に基づく自己同定と他者との差異化に他ならない。そして、そうしたシンボル複合体が存在するからこそネーションは存在する。カッシーラーがシェリングを引き継いで述べたように、「神話—宗教的意識が社会形式の事実に存立から単純に結果してくるのではなく、むしろこの意識こそ社会構造を成立させる条件の一つであり、つまりは共同体感情と共同体生活のもっとも重要な因子のひとつ⁵⁰⁾」なのである。

このように見るならば、言語ナショナリズムが特に強調されることや、エスニックな、あるいはナショナルなシンボル複合体が多様な性格をもつことの理解が可能となる。言語共同体は、最も基本的なシンボル体系を軸としている。同一言語がもたらす差異性と価値、そして表出的な文化体系があるがゆえにその社会、つまり言語共同体としてのエスニックあるいはナショナルな社会が実体として存在するという観念が容易に生まれる。そして、居住空間の隔絶からよしんば実質の社会関係が存在しないとしても共同幻想は生き続きうる。他方、言語を含めてエスニックなあるいはナショナルなシンボル体系は非自然的な一種の複合体であって、決まりきったパターンをもつわけではない。歴史的記憶が、あるいは宗教が言語よりも強い紐帯となること、換言すれば、ユダヤ・アイデンティティーに代表されるようなナショナル・アイデンティティーが存在することも不思議ではなくなる。ネーションの規定にあたって、どのように規定しても「例外」が見出される⁵¹⁾という困難をもたらしたのは、こうしたシンボル体系の本質にある。客観的実在が意識に投影されるはずだという確信なり、シンボル体系の恣意性の無視は、そうした困難の由来の発見を妨げたのであった。

また、シンボル体系の中にナショナル・アイデンティティーを位置づけて考えれば、既に言及したナショナリズム論の中での本源主義と近代主義の対立には大きな意味が無いことも明らかになる。シンボル体系自体は自然の産物ではなく、あくまでも人為的に生み出されたものに他ならない。その意味では、常に「伝統の創造」の契機がシンボル体系には含まれるのであり、だがしかし容易に操作的に変化・変容しうるものではないことも展望しうるからである。

むしろ、次のように考えるほうがナショナル・アイデンティティーの理解が容易になる。ナショ

50) Cassirer (1987 [1925]), p.219 (邦訳 [二], p.336). なお、このような見方を社会学で展開したものに Bengler (1990 [1967]) がある。

51) Hobsbaum (1990), pp.5-6, (邦訳, p.6).

ナルなシンボル複合体が生まれることによってネイションが生まれる。シンボル体系は、自然的に存在した客体ではないが、それはあたかも自然に存在してきたかのように受容されるのだと。では、何ゆえにシンボル複合体は自然で本源的なものとして現象するのであろうか。

シンボル複合体の持続性と自然性

ナショナル・アイデンティティーをもたらすシンボル複合体は永遠のものではない。それは、文化自体が変化・変容を遂げてきたことから、またナショナル・アイデンティティー自体がある時代と別の時代では異なることから明らかである。そのことは、シンボル体系自体の歴史的变化を一瞥すれば容易に理解されうるであろう。言語はこれまで著しく変化してきた。いずれの国の言語を見ても音素や基本文法は容易に変化しないが、語彙や言葉の使用法に大きな変化が見られないような言語は無い。しかも、第2次大戦後の僅か数十年間をとっても著しい変化が存在する。

生存者の誰も知らないはるか過去から継承され、あたかも永遠のもののように思われるシンボル体系の中にも大きな変化が存在する。鎮守の杜の神は、はるか昔から共同体の神を祀るものであり、神道のいずれかの大神・官社と関係してきたかのように思われるが、幾つかの大神一応神天皇などを祀った八幡神社、菅原道真を祀った北野天満宮などを除けば、神社の祖形は氏族共同体の氏神を祀るものであった。鎮守の杜は氏族共同体の変化・変容や社会構造の変化から幾つかの氏神を統合して形成されたのであり、まして天皇家の神社との系列、あるいは「古事記」にみる「日本神話」との関係での伝統が付加されたのは、幾度と無く生じた社会構造の変化とそれに対応したイデオロギー操作によってであった⁵²⁾。そのような鎮守の杜の神

を明治以来の人々は、祖先以来変わらぬ村や町の土着神あるいは古事記や日本書紀に見られる天皇家の神と縁をもつ古来の神として祀り、神輿をもって神を迎え、ハレを楽しみ、家々の神棚に祀られた神が本来は氏神であるべきことなど思いもしない。そして、人々は鎮守の神や大社から得た御札や御幣を祀って毎日家の神棚に祈るのである。

「本源的紐帯」に着目するギアツもそれを否定しているとは言えない。何よりもギアツのシンボル体系に関する議論はイデオロギーの作用に関わるのであり、イデオロギーの形成については「利益説」と「緊張説」の彼なりに総合的な理解を示しているからである。社会構造の変化は既存の文化体系の合理性の基盤を揺るがし、緊張や反作用をもたらし、否応なしにシンボル体系の変化・変容を引き起こすであろう。社会構造の変化の中から生み出されるディスクールや映像・音楽は言語や宗教、慣習にも大きな変化・変容をもたらさずにはおかないであろう。

だが、それにもかかわらず、シンボル体系は人々には「自然」で「本源的」であるかのように作用する。その最もよい例は、あるエスニック共同体なりナショナル共同体の文化なりシンボル体系が変化・変容を遂げつつも固有のパターンをもつことであろう。超国家主義を生み出した精神的基盤の変革を求めながら、ある不変の日本的なものを意識せざるをえなかった日本の知識人、たとえば加藤周一や丸山真男が1970年代に問題としたことを取り上げてみよう。「日本文化の雑種性」を夙に問題としていた加藤周一は⁵³⁾、日本文化の「雑種性」が、さらに種々の日本的特質が古代から現代にいたるこの国の精神文化の歴史を貫いて存在していることを『日本文学史序説』の中で述べるにいたる⁵⁴⁾。

(1947)を参照されたい。また、明治維新以後の宗教政策については、村上重良(1970)、安丸良夫(1992)などを参照されたい。

53) 加藤周一(1979 [1955]), (1979 [1957])。

54) 加藤周一(1975)の「日本文学の特徴について」(pp.6-33)。

52) 神社の変容については、たとえば柳田國男

同じように丸山も、日本の文化接触の独自性を『日本の思想』において早くから指摘していたが⁵⁵⁾、外来のイデオロギー体系が日本に導入されて変化・変容を受ける際に日本的な変化・変容の仕方が作用していることから「主旋律を変化させる契機⁵⁶⁾」としての日本史思想史における「古層」の解明に向かったのである。

同様な問題は外国にも存在する。哲学を見てみよう。互いに多くの影響を受けあい、しかも最も普遍的主題を追及する学問でありながらも、依然「フランス哲学」「ドイツ哲学」「イギリス哲学」のように哲学はナショナルな性格をもつ。また、同じ問題は文化の別の側面にも存在する。種々の外国の食材や料理法があれこれの国に導入され、かつてのような地域性を失いながらも、つまるところアメリカ的「日本料理」や日本的な「中国料理」や「イタリア料理」が存在する。そして、そのような「国民的性格」は自然的な、恣意的には左右し得ない存在であるかのように捉えられることになる。

このような文化体系の持続性については未だ十分な解明がなされているとはいいがたい。ここで十全の考察を展開することも到底なしえないが、ナショナル・アイデンティティーの謎を幾つかの要素から解く試みをしておこう。

変化・変容を媒介とする持続と継承がもたらす拘束性

何よりも注目しなければならないのは、文化なり、人間の精神活動一般が変化・変容を遂げつつも固有に伝達されていくことである。シンボル体系を不可欠の構成要素とする「文化は伝達され、それは一つの遺産ないし社会的伝統をなしている⁵⁷⁾」とパーソンズは言う。そして、「文化は、一つの社会体系から他の社会体系へ

と伝播できる」という「伝達可能性 transmissibility」をもつことによって⁵⁸⁾、一個の、複数のシンボル体系から構成される歴史的複合体として認識されることになる。ナショナリストによる共同体の「再発見、再解釈、再生」を可能にする基盤はここにある。あるシンボル体系複合体は、変化・変容をこうむりながらも「一つの文化」として伝達され、時間を通じて継承され、一つの歴史的な存在となるのである。

このような文化の性格は、シンボル体系自体の特質に起因する。シンボル体系は、自然の産物ではない。それは人間の社会的行為の中で生じたものに違いないが、しかしながら人間の知的・感情的表現や思考を左右する。言語がそのよい例であり、そうした言語機能を追求したのはソシユールであった。「記号 (signe) が伝統の法則において他の法則を知らないのは、ほかでもない、記号が恣意的であるからであり、またそれが恣意的でありうるのは、それが伝統にもとづくからである⁵⁹⁾」という指摘、あるいは「自由を無効にする連続性の原理」への着目は、言語のみではなくシンボル体系一般にも適用しうる。

誤解のないように断っておくが、伝達は変化・変容を排除するものではない。このようなシンボル体系の中では、不断に外部文化との関係が生まれ、内的な変化も生じる。中には継承されずに消滅し、忘却される記憶やシンボルも存在するであろう。それにもかかわらず一個のシンボル複合体としての継承がなされることにより、その文化は固有に生き続ける。あたかも一人の人間が不断の新陳代謝や学習などによって大きく変貌しても彼または彼女としての人間であることを失わないかのように。あるいは一つの家系が毀誉褒貶によって過去とはまるで異なるものとなり、外部の血統が入り、また外に別の家系を生み出していったとしても、そしてその家

55) 丸山真男 (1961)。

56) 丸山真男 (1996 [1979]), p.181。

57) Parsons (1951), p. 15 (邦訳, p.20)。

58) *Ibid.*, p.15 (邦訳, p.21)。

59) Saussure (1964 [1916]), p. 108 (邦訳, p.106)。

系が過去とはまるで異なる慣習に従うようになったとしても、一個の家系であることの意味は失われず、その家系の「伝統的」な祝祭は常に営まれるように。

先にも指摘した言語の変化・変容と持続性はそのよい例となる。言語は、場合によってわずか数十年で変化してしまう。現代の青年にとっては第2次大戦時の英語、ドイツ語、日本語、イタリア語などははるか過去の言語として意識される。被支配民族の言語が失われるのはよくあることだが、支配集団の言語が失われる場合もある。中国における遊牧民族集団の侵入と漢文化の摂取を想起すればよい。日本では、支配的階級が中国語(シナ語)を導入することによって、中国において発達した諸制度にならって政治・社会制度を整備するとともに抽象的概念を獲得する手段を見出した。そして、貴族階級は一方で伝統的な「うた」の世界を引き継ぎながら、他方で漢作文をもって法や制度を定め、行政文書を作成し、思想を語り、字音語を創造したのであった。江戸時代の国学者たちがいかに漢学からの離別を志そうとも言語表現においてそれが困難であったことは本居宣長から平田篤胤への、さらに明治以後の国学者の言説への転変の中によく示されている。「国学」思想の追求自体が、思想内容の面で儒教の影響を排除しえなかったばかりか、表現の面でも漢語・字音語を不可欠としたのである。しかし、それでもなお、日本語は日本語としての言語的伝統の中で変化を遂げてきた。音素と文法は基本的に継承されてきた。日本語の変化・変容は日本語の継承を意味するのであって、日本語の消滅を意味しない。現存する言語は、過去にどのような変化を遂げたとしても、その言語特有の音素・文法・語彙を継承しながら、当のその言語の変化以外のなにもものでもない言語的变化を遂げてきたのである。まことに言語は、ソシュールの言うように恣意的でありながら、自然のように言語共同体を束縛する。

また、より広く文化の継承にもそれと同様の

ことが言える。「日本文化」が「武士道」を継承していること、名聞を重んじる「恥の文化」がその一つであることはよく知られていよう。だが、「恥の文化」は、創成期から戦国時代に至る武士の独立性と戦場を基盤に生まれた道徳律が変化・変容し、江戸時代になって形式化が極端に進んだ結果として生まれたものである。武士が自己の知行地から切り離された階級となつてから主君、さらに主君を代表者とする「お家」への忠誠を第一とするようになったこと、それに関連して名聞を極度に重んじるようになったからである⁶⁰⁾。そのように形式化した「武士道」では、戦国時代に合理的と見られ一般的でさえあった「調略」に応じる武士の主君替えの自由は否定されることになり、「下克上」に見られるような秩序を破壊する武士の荒々しい自立の精神とエネルギーは影をひそめてしまう。かくも変化・変容した「武士道」が、主君替えをした「外様大名」が多く存在した中で、まるで源平の昔から不変の道徳であるかのように説かれたのであった。しかも、「武士道」は天皇への忠誠とはまったく異なる系譜の文化であるにもかかわらず、明治以後の日本社会の中では、江戸時代に形式化され、さらには朱子学の影響を受けた「武士道」が「大君への忠誠」と混交して日本人の精神と行動を規定するようになる。しかし、そのように変化・変容を伴うにしても後代の「武士道」は前代の「武士道」を継承するのであって、「武士道」の消滅には至らない。それどころか、武士階級が減った後にも、「国民的」な英雄談の中で「武士道」は幾度も確認され、「主君への忠誠」や「武人としての心構え」は明治・大正時代に、さらに第2次大戦後の企業社会や官僚社会でも人々の意識を規制する。

ソシュールが先駆的に述べたように、シンボル体系は非自然的であり、それ故に客観的合理性に規定されて生じたものとは異なる規定性を

60) 津田左右吉(1978 [1918~1921])「第一篇 平民文学の隆盛時代」の第十三章、十四章を参照。

人々の意識に及ぼす。だが、これまで見たように、伝統は変化・変容を排除するものではない。言語や神話やその他のシンボル体系にせよ、近代の社会学者が考えたようには客観的合理性に対応して直接生み出されたものではないにしても、歴史的に変化・変容を遂げる客観的世界にいかに対応するのかという緊張関係に直面する。そこで、おそらくはつまり、これは一個のアドホックな推察の域にとどまるのだが、客観的世界への適切な対応を欠くシンボル体系は変化・変容を迫られる。言語の内でも最も変化を被りやすいのが語彙であるという点は、それを示しているであろう。したがって、シンボル体系は、マックス・ウェーバーが見たような合理性の側面とともに、それだけでは理解しえない「非合理的」あるいは「伝統的」で情緒的で装飾的であるような諸側面を併せ持つのである。社会学者のシンボル体系解釈は、このような両面の前者にのみ着目したものであった。

いかなる変化・変容を伴うにせよ、文化の継承と伝達は、社会的な環境と同様に人々の意識や思想を制約する。どのような意識や思想も環境によって直接に規定されるのではなく、すでに存在し、人々が学習し、それをもって伝達コードとする種々のシンボル体系を媒介に環境の変化・変容や転換に反応する。たとえば絶対王政の中で生まれていった市民意識や自然権意識を見てみよう。商人や独立生産者の企業努力と競争は近代的個人意識形成をもたらすが、それが直ちに議会制や民主主義の生誕につながるとは言えない。「旧き市民社会」における独立した自由人の意識や封建議会の伝統がもたらした「マグナカルタ」なしには、「権利の章典」は生まれがたかったとも言える。日本では、「兵農分離」以来、武士が独立した自由人から大名の家産官僚に転じて公共性を失い、それ故に武士層は、イングランドのかつての騎士層とは異なり、市民革命や議会制民主主義の運動主体とはなりえなかった。近似する封建制から出発しながら、前にも指摘したが、マルク・ブロックの

言う西欧と日本の封建制の分岐が生まれていったのである⁶¹⁾。そして、江戸時代に形成された「武士道」は、その後の武士層の思想と意識を規定するようになる。明治維新から自由民権運動にかけて議会制や民主主義を提唱した旧武士層は、輸入される近代的な知の世界に接近した知識人としてそうしたのであり、「一所懸命」に自己の土地を経営し拡大していった旧き関東武士やジェントリーの伝統に基づいてそうしたわけではなかった。かつて武士でもありえたが、農民であることを選択した名主層や豪農が自由民権運動を担ったのは、この点で興味深いものがある。

ここで注意しなければならないのは、客観的な社会経済的変化・変容が人々の意識を直接に規定するのではなく、そうした外的諸条件に対応して変化・変容を遂げるにしても、シンボル体系とそれに基づくディスコースが人々の意識を直接に規定するという点である。このような意味で、マルクスの上部構造論はいささか粗すぎると言わねばなるまい⁶²⁾。丸山真男は、マンハイム (Mannheim, K.) の影響を受けつつ、思想に対する「存在拘束性」を認識論的側面に拡大し、既存の思惟様式、シンボル体系など含む概念としたが⁶³⁾、ナショナル・アイデンティ

61) Bloc (1968 [1939]), p.619 (邦訳, p.555).

62) マルクス (1961) が、『経済学批判』の「序言」において「人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意識から独立した諸関係に、すなわち、彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはいる。これら生産関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが実在的土台であり、その上に一つの法律のおよび政治的上部構造がそびえ立ち、そしてそれに一定の社会的諸意識形態が対応する。物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである」(pp.8-9, 邦訳 p.6) と「史的唯物論」を簡潔に述べている。「彼らの社会的存在」にシンボル体系が含まれていないことは明瞭であろう。

63) 丸山真男 (1996 [1978])。

ティーの「自然的」あるいは「本源的」性格を理解するには、そうした存在拘束性あるいは存在制約性に着目する必要がある。ナショナルリズムが「旧きもの」「正統なるもの」「聖なるもの」「真正なるもの」などを唱えるときに、その解釈や教義がいかに荒唐無稽であったとしても古来の継承がそこにあるかのように理解される基礎がここには存在する。

動かない歴史と生活感覚

一定の文化体系の中で育まれた意識や思想は、このようにして継承されるが、継承と変化・変容の速度とあり方は社会の諸層によって区々となる。ある時代やある社会層では著しく速度は遅くなる。その1つの理由は、フェルナン・ブローデルが『地中海』において、「ほとんど動かない」「人間を取り囲む環境と人間との関係の歴史」、「緩慢なリズムを持つ」「人間集団の歴史」、そして「短く、急であり、神経質な揺れを持つ」「出来事の歴史」という、「地理的」「社会的」「個人」の三層に成層化された時間・次元に歴史を分解したことに関係する⁶⁴。和辻哲郎が「歴史性のみが社会的存在の構造なのではない。風土性もまた社会的存在の構造であり、・・・歴史性と風土性との合一においていわば歴史は肉体を獲得する⁶⁵」と述べたこともこれに関係するであろう。地理的環境は、いやおうなしに人間の行動と感情を、労働と意識を規定する。それは地理的環境から離れ難い生活を営む層では重みをもつことになる。都市や交通手段、そして情報の未発達段階では、おそらく社会の隅々までも環境が制約するであろう。

自然的環境からの制約が低下するにしても、新しい情報や思想を常に受容する知識人層に対して、そうでない階層では「動かない歴史」が継続する。そこでは、地理的環境よりも惰性が

強く作用する。左右を問わず保守的な政治や運動はそうした惰性を運動の基盤とする。ルオフ (Ruoff, K. J.) は、戦後日本の天皇制をめぐる、神社本庁や日本遺族会をはじめ右派組織が「草の根」から紀元節復活や元号法制化などをめざす運動を構築したことを示し、そうした運動が単に支配層の上からの意図に基づくものではなかったこと、また「象徴天皇制」が大衆の意識に基盤を置いていることを明らかにしている⁶⁶。もちろん、それゆえに、右派組織は、自己のイデオロギーに基づく天皇制の復活に挫折を繰り返す結果となる。知識人や左右の政治的・宗教的組織が主導する政治的運動は「動かない歴史」に属する階層の意識を制約条件としているのである。

おそらく「動かない歴史」に属する人々は、近代以前には「出来事の歴史」に意識的に関係することはなかったであろう。そうした階層は、近代以後は「世論」を通じて政治的変動に関わるようになる。そして、新聞や種々のマスコミュニケーションの発達は、知識人や政治的組織と「動かない歴史」の階層をつないで「世論」を形成し、シンボル体系を創造・再生産・再解釈する力能をもつ。津田左右吉が、実生活から離れた知識を絶対視して学んだ日本の知識人のあり方が中国思想の日本思想への影響を阻害したと論じたように⁶⁷、あるいは丸山真男が講義録において幾度かの修正を試みながら示しているように⁶⁸、外来思想を受容する知識人の思想と一般的な日常生活の中で意識される思想・慣習・

66) Ruoff (2001).

67) 津田左右吉 (1938), pp.30-102, pp.152-178.

68) 丸山真男 (1999) は、1965年の講義録で、思想が学説・理論、意見、思潮・時代精神、生活感情・生活感覚の4層から構成されるとしている (pp.15-17) が、同時に文化が上層から底辺にいたる成層化された構造をなしていると述べている (pp.31-40)。このような探索は、1967年の講義では (丸山真男 1998)、外来思想を頂点とし、土着が底辺に位置する成層として考察されている (pp.31-32)。

64) Braudel (1966 [1949]) の初版序文参照。

65) 和辻哲郎 (1963 [1935]), p.16。下線部は傍点。

信念の間には亀裂と距離が存在する。そして後者の変化・変容は容易に生じない。知識人にしても、その思想はともかく日常生活の中での意識のあり方にはあまり変化・変容が無いとも言える。

そうした日常の意識は、継承される文化的伝統を最もよく通俗的に温存し、同時に主情的要素を濃く保有する。「壮麗なもの」「大きなもの」「華やかなもの」「にぎやかなもの」「派手なもの」ではなく、「小さなもの」「可愛いもの」「清々しいもの」「孤独なもの」「簡素なもの」に「美」を感じるような日本的な美感が日常の中に生きていることを考慮すればよい。言うまでもなく、本居宣長の「もののあはれ」もそうした日本の感覚を表現する言葉である。九鬼周造は、「ある民族の特殊の存在様態が核心的のものとして意味および言語の形で自己を開示しているのに、他の民族は同様の体験を核心的のものとして有せざるがために、その意味および言語を明らかに欠く場合がある⁶⁹⁾」として「いき(粹, 意気)」をとりあげたのであったが、そのような「意味および言語」の有無、さらに相違などは、日常の感覚を表現する言葉に多く見られるであろう。このような日常の意識や感覚は、ナショナル・アイデンティティーの主情的側面に容易に結合し、時には外国文化への感情的反発や拒絶に結合する要素ともなる。主情主義的な色彩をもつ種々の形態のロマン主義が社会に浸透する基礎には、「動かない歴史」と「日常」に沈殿する意識や感覚が確かに存在する。

アイデンティティーと起源を求める遡行

文化やシンボル体系の持続性とは別個に、あるナショナル・アイデンティティーが「自然的」な、あるいは「本源的」なものとして意識される理由として注目すべきは、ネイションの「起

源」への遡行がアイデンティティー形成の中でなされるということがあろう。

ソボクレスの描く「オイディプス王」は自分の「素性」を捜し求める。誰しもが、自分の帰属するところ一家族、教会、地域など様々な環境から自己を自己として確認するが、同時に、その由来と起源を捜し求める。自己が何処から来たのか、どのようにして今ここにいるのか—そうした問いかけはアイデンティティー形成に不可避である。

わけても、他者との接触はそうした探索の大きな契機をなす。一般に、人は他者との関係を結ぶ中でアイデンティティーを探し求める。始めに共有するものと相違するものとの区別がなされ、自己が他者どどのように相違し、自己がどのようにして自己であるかが求められていく。共有するものが多いときに人々は互いに同一の集団に帰属することを確認する。性や身体的特徴などの外形的特質による区別と同一性の確認の次には、シンボル体系を基礎におく文化体系の区別と同一性が問題とされる。相違の認識の次には相違の起源が、つまり「自分は何者であるのか」「他者は何故に自分とは異なるのか」の探索が始まる。

社会的帰属が問題となるときには、そうした探索は、自己の帰属集団のシンボル複合体、文化体系を所与の自然の、本源的なものとして置くことをもたらす。たとえば、異なる家族間では「家風」が意識され、学校間では「校風」が、そしてエスニック集団間ではエスニックなシンボル体系が意識される。所与性は、しかもシンボル複合体が過去に大きな変化・変容を遂げたか否かにかかわらず、現在のそれを自然の、本源的なものを継承したものとして意識させる。シンボル複合体なりアイデンティティーの所与性と有界性自体が、人々に自然の、本源的なアイデンティティーの存在を確信させるのである。

このような他者との接触に契機をもつシンボル体系のアイデンティティーへの転化は、マックス・ウェーバーも夙に注目したところであっ

69) 九鬼周造 (1967 [1930]), pp.5-6.

た。ウェーバーは、言語に関して、「言語の共通性そのものは、未だ共同社会関係を意味するものではなく、精々、その集団内部における交流の促進、従って、利益関係の促進を意味するに過ぎない」とし、だが、「第三者に対する意識的対立が生じるに及んで、漸く、言語を共有する人々にとって、同じ状況が生まれ、共同体感情が生まれ、共通の言語を意識的な存在根拠とする利益社会関係が生まれて来る」と述べている⁷⁰⁾。

無論、そうした意識が直ちに自己の帰属集団や社会への忠誠や愛着をもたらすわけではない。他者が異端＝特殊で、邪悪で、汚れたものとして認識されるか否か、その反対に正統＝普遍で、正義を体現し、神聖なものとして認識されるか否かという問題と、その対極での自己認識のあり方によって反応はまるで異なるものとなる。そうした反応は別にして他者との区別の中で自己が何者であるのかが探られ、その際に自己が帰属する集団の文化体系、シンボル体系は自己にとっては所与の、自然の、本源的なものとして受けとめられる。そして、次には、何ゆえにそうなったのかという歴史への探索が始まる。

歴史は、自己あるいは自己の帰属する集団や社会の起源への遡行として意味をもつ。歴史ほど現在の解釈と理解のために存在する学問は無いと言えるかもしれない。ランケは歴史を講ずるにあたって、現代にある影響をおよぼしているところから出発するとしてローマ時代から始めたが⁷¹⁾、遡行の終点、つまり起源の設定は常に現在の理解のためになされる。換言すれば、起源の発見は歴史研究や歴史的探索の重要な目的それ自体とも言える。そして、同時に歴史は現在のために探索され、書かれ、読まれるのであり、時にはある種の創造、忘却、想像などを伴いもする。クロオチェは「現在の生の関心の

みこそが人を動かして過去の事実を知ろうとさせることができる⁷²⁾」と述べたが、そうした歴史の探索のあり方に問題があるか否かは別にして、現在から離れた歴史は存在しえない。歴史家は、E・H・カーが述べるように⁷³⁾、現在からの問いかけと客観的に残された史料が問いかけるものとの間の緊張の中に常に置かれる。

無論、ネイションの起源は明瞭ではない。それは、歴史的事実と創出されたシンボル体系の記憶が溶け合う混沌の中にしばしば見出され、また歴史の中で変化する。それでも、人々が自己のアイデンティティーを探し求めて歴史を遡行し、とにもかくにも起源を見出したときに、探索を始めた時に帰属集団の文化体系に見出す「本源性」「自然性」は、歴史的に正統なものとして新たな意味を獲得する。歴史的過程は不可逆的な一回限りの具体的で固有の経験からなる。そうした固有性、不可逆性は、先に指摘した文化体系の継承性や存在制約性とあいまって、歴史の結果としての現在のシンボル複合体を一個の自然的、本源的なものとして見る結果を導く。

ナショナル・アイデンティティー、そして種々の共同体や社会における正統化における「血統」の意味も今述べたことに関連する。起源の探索は、祖先の探索と同一化する。そして、同時に起源の探索と解明は、現在の共同体をしばしば血統共同体であるかのような錯覚へと導く。様々な血統が入り混じって形成された歴史や外部王朝による征服の記憶は忘却もしくは軽視され、「偉大な王」や「独立」「統一」に前後する「一貫した民族史」が記憶されるようになり、そのネイションがあたかも血統共同体としての基盤や歴史をもつかのように意識されるようになる。血統や人種が、ナショナリズムやエスノセントリズム、あるいはナショナリズムと共鳴しあう種々の極右的イデオロギーにおいてある種の役割を果たすのは、こうした文脈からである。

70) Weber (1976 [1921-22]), p.23 (邦訳, pp.69-70).

71) Ranke (1921 [1854]).

72) Croce (1920), p.4 (邦訳, p.17).

73) Carr (1961), pp.3-35 (邦訳, pp.1-40).

これまで、ナショナリズムやナショナル・アイデンティティーに基づくアイデンティティー・ポリティックスの起源を求めてネイションとは何かという問いを吟味してきた。その結果、一方では、ナショナル・アイデンティティーとナショナリズムが「近代」の所産に他ならないということが、他方では、変化・変容を伴いながらもナショナル・アイデンティティーは「本源性」や「自然性」を帯びることが浮かび上がってきた。ナショナルなシンボル複合体は、固有の体系として伝達されて意識を拘束し、「動かない歴史」の中で生き続け、起源をもつものとしてアイデンティティーを支える。こうして、どのような変化・変容を遂げようともナショナル・アイデンティティーは本源的で自然なものであるかのように意識される。ネイションは近代の産物でありながら、ステイトとしての国家や産業社会とは別個の歴史的に自然の、所与の社会単位と意識されるようになる。では、ナショナリズムやナショナルなアイデンティティーに基づく政治-アイデンティティー・ポリティクスは政治の中でどのような位置を占めるのだろうか。このことが次の考察の課題となる。(未完)

[追記]

本研究は、平成15年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(c)(2))「グローバル・エコノミーにおける世界経済管理の政治経済学的考察」、および21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築：中域圏の形成と地球化」の一環をなしている。

参考文献

- Akerlof, G. A. (1984), *An Economic Theorist's Book of Tales; Essays that entertain the Consequences of New Assumptions in Economic Theory*, Cambridge University Press, Cambridge (幸村千佳良・井上桃子訳『ある理論経済学者のお話の本』, ハーベスト社, 1995年)。
- Anderson, B. (1983), *Imagined Communities: Re-*

lections on the Origin and Spread of Nationalism, Verso, London (白石隆・白石さやか訳『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』, リプロポート, 1987年)。

- Berger, P. L. (1990 [1967]), *The Sacred Canopy: Elements of a Sociological Theory of Religion*, Anchor Books, New York (藺田稔訳『聖なる天蓋』新曜社, 1979年)。
- Berlin, I. (1979), *Nationalism, Past Neglect and Present Power, Against the Current*, The Hogarth Press, London (福田敏一・河合秀和編訳『バーリン選集I, 思想と思想家』, 岩波書店, 1983年)。
- Bloc, M. (1968 [1939]), *La société féodale*, Albin Michel, Paris (堀込庸三監訳『封建社会』, 岩波書店, 1955年)。
- Bloom, W. (1990), *Personal Identity, National Identity and International Relations*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Braudel, F. (1966 [1949]), *La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*, Armand Colin, Paris (浜名優美訳『地中海』, 藤原書店, 1991-1995年)。
- Carr, E. H. (1961), *What Is History?*, Vintage Books, New York (清水幾太郎訳『歴史とは何か』, 岩波新書, 1962年)。
- (1964 [1939]), *The Twenty Year's Crisis: 1919-1939*, Harper & Row, Publishers, Inc., New York (井上茂訳『危機の二十年, 1919-1939』, 岩波文庫)。
- Cassirer, E. (1988 [1923]), *Die Philosophie der symbolischen Formen, T.1. Die Sprache*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt (生松敬三・木田元訳『シンボル形式の哲学〔一〕』, 岩波文庫, 1989年)。
- (1987 [1925]), *Die Philosophie der symbolischen Formen, T.2. Das mythische Denken*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt (木田元訳『シンボル形式の哲学〔二〕神話的思考』, 岩波文庫, 1991年)。
- (1990 [1929]), *Die Philosophie der*

- symbolischen Formen, T. 3. Phänomenologie der Erkenntnis*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt (木田元訳『シンボル形式の哲学〔三〕認識の現象学(上), 同〔四〕認識の現象学(下)』, 岩波文庫, 1994, 1997年)。
- Coulmas, F. (1985), *Sprache und Staat : Studien zur Sprachplanung*, Walter de Gruyter, Berlin (山下公子訳『言語と国家—言語計画ならびに言語政策の研究』, 岩波書店, 1987年)。
- Condorcet, Marquis de (1770 [1793-94]), *Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain*, Librairie Philosophique J. Vrin, Paris (渡辺誠訳『人間精神進歩史 第一部』, 岩波文庫, 1951年)。
- Croce, B. (1920 [1915]), *Theoria e Storia della Storiografia*, Bari, Laterza (seconda edizione riveduta) (羽仁五郎訳『歴史の理論と歴史』, 岩波文庫, 1952年)。
- Deutsch, K. W. (1966 [1953]), *Nationalism and Social Communication : An Inquiry into Foundations of Nationality*, MIT Press, Cambridge (USA)。
- Durkheim, É. (1956 [1895]), *Les règles de la méthode sociologique*, Presses Universitaires de la France, Paris (宮島喬訳『社会学的方法の規準』, 岩波文庫, 1978年)。
- (1969 [1897]), *Le suicide : étude de sociologie*, Presses Universitaires de France, Paris (宮島喬訳『自殺論』, 中公文庫, 1985年)。
- Erikson, E. H. (1980 [1959]), *Identity and the Life Cycle*, W. W. Norton & company, New York. (1968), *Identity: Youth and Crisis*, W. W. Norton & Company, New York.
- Fichte, J. G. (1971 [1808]), *Reden an die deutsche Nation, Fichtes Werke VII. Zur Politik, Moral und Philosophie der Geschichte*, Walter de Gruyter & Co. Berlin (大津康訳『ドイツ国民に告ぐ』, 岩波文庫, 1928年)。
- Foucault, M. (1975) *Surveiller et punir : naissance de la prison*, Gallimard, Paris.
- Fukuyama, F. (1989), *The End of History?, The National Interest*, Summer (No. 16).
- Gaddis, J. L. (1991), *Toward the post-cold war world*, *Foreign Affairs*, Vol. 70, No. 2.
- Geertz, C. (1973), *The Interpretation of Cultures*, Basic Books, New York (吉田禎吾・柳川啓一・中牧弘充・板橋作美訳『文化の解釈学 I, II』, 岩波書店, 1987年)。
- Gellner, E. (1983), *Nations and Nationalism*, Basil Blackwell, Oxford.
- Hechter, M. (2000), *Containing Nationalism*, Oxford University Press, Oxford.
- Herder, J. G. (2004 [1774]), *Another Philosophy of History*, translated by I. D. Evrigenis and D. Pellerin, Hackett, Indianapolis (ドイツ語原題 *Auch eine Philosophie der Geschichte zur Bildung der Menschheit*.) (小栗浩・七字慶紀訳「人間性形成のための歴史哲学異説」, 登張正實『世界の名著 38巻, ヘルダー, ゲーテ』, 中央公論社, 1979年)。
- Hertz, F. (1944), *Nationality in History and Politics : A Psychology and Sociology of National Sentiment and Nationalism*, Routledge & K. Paul, London.
- Hobsbawm, E. J. (1990), *Nations and Nationalism since 1789 : Programme, Myth, Reality*, Cambridge University Press, Cambridge (浜林正夫・嶋田耕也・庄司信訳『ナショナリズムの歴史と現在』, 大月書店, 2001年—ただし本訳書底本は1992年の第2版)。
- Hobsbawm, E. J. & Ranger, T. (1983), *The Invention of Tradition*, Cambridge, Cambridge University Press (前川啓治・梶原景昭他訳『創られた伝統』, 紀伊国屋書店, 1992年)。
- Huntington, S. P. (1993), *The clash of civilizations?*, *Foreign Affairs*, Vol. 72, No. 3.
- (1996), *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, Simon & Schuster, New York.
- Kaldor, M. (2001 [1999]), *New and Old Wars ;*

- Organized Violence in a Global Era*, Polity, Cambridge.
- Kaufman, S. J. (2001), *Modern Hatreds : The Symbolic Politics of Ethnic War*, Cornell University press, Ithaca.
- Kedourie, E. (1994 [1960]), *Nationalism*, Blackwell, Oxford.
- Kellas, J. G. (1991), *The Politics of Nationalism and Ethnicity*, Macmillan, London.
- Kohn, H. (1944), *The Idea of Nationalism*, Macmillan, New York.
- Marx, K. (1961), *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Band 13, Dietz Verlag, Berlin (大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス=エンゲルス全集 13 巻』, 大月書店, 1964 年)。
- (1966 [1867]), *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie*, Erster Band, Dietz Verlag, Berlin (大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス=エンゲルス全集 23-a 及び b 巻, 資本論 第 1 部』, 大月書店, 1965 年)。
- Merriam, C. D. (1966 [1945]), *Systematic Politics*, University of Chicago Press, Chicago.
- Mill, J. S. (1909 [1848]), *Principles of Political Economy : with some of their applications to social philosophy*, Longmans, Green, and Co. London (末永茂喜訳『経済学原理』全 5 冊, 岩波文庫, 1963 年)。
- Mosse, G. L. (1975), *The Nationalization of the Masses ; Symbolism and Mass Movements in Germany from the Napoleonic Wars through the Third Reich*, Howard Fertig, New York (佐藤卓巳・佐藤八寿子訳『大衆の国民化, ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化』柏書房, 1994 年)。
- Parsons, T. (1951), *The Social System*, Free Press of Glencoe, Glencoe (佐藤勉訳『社会体系論』, 青木書店, 1974 年)。
- Ranke, Leopold von, (1921 [1854]), *Über die Epochen der neueren Geschichite*, Duncker und Humblot (鈴木成高・相原信作訳『世界史 概観—近世史の諸時代』, 岩波文庫, 1941 年)。
- Renan, E. (1882), *Qu'est-ce qu'une nation?*, http://agalmata.tripod.com/renan_nation.html September 3, September 3, 2002 (鶴飼哲訳「国民とは何か」, 鶴飼哲他著『国民とは何か』, インスクリプト, 1997 年所収)。
- RIIA (Royal Institute of International Affairs) (1963 [1939]), *Nationalism*, Frank Cass and Co. Ltd., London.
- Ruoff, K. J. (2001), *The People's Emperor ; Democracy and the Japanese Monarchy, 1945-1995*, Harvard East Asian Monographs, Cambridge (USA) (高橋紘監修, 木村剛久・福島睦男訳『国民の天皇, 戦後日本の民主主義と天皇制』共同通信社, 2003 年)。
- Sanderson, M. (1992), *Eduaction, Economic Change and Society in England 1780-1870*, Macmillan, London.
- Saussure, Ferdinand de, (1964 [1916]), *Cours de linguistique generale*, Payot, Paris (小林英夫訳『一般言語学講義』, 岩波書店, 1972 年)。
- Seton-Watson, H. (1977) *Nations and States : An Inquiry into the Origin of Nations and the Politics of Nationalism*, Westview Press, Boulder.
- Smith, A. (1920 [1776]), *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Methuen, London (大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』全 2 冊, 岩波書店, 1969 年)。
- Smith, A. D. (1979), *Nationalism in the Twentieth Century*, Australian University Press, Camberra (巢山靖司監訳『20 世紀のナショナリズム』, 法律文化社, 1995 年)。
- (1986), *The Ethnic Origins of Nations*, Blackwell, Oxford (巢山靖司・高城和義訳『ネイションとエスニシティ』, 名古屋大学出版会, 1999 年)。
- (1991), *National Identity*, Penguin Books, London (高柳先男訳『ナショナリズムの生命力』, 晶文社, 1998 年)。
- (1995), *Nations and Nationalism in*

- a *Global Era*, Polity Press, Cambridge.
- Smith, A. D. (1998), *Nationalism and Modernism : A Critical Survey of Recent Theories of Nations and Nationalism*, Routledge, London.
- (1999), *Myths and Memories of the Nation*, Oxford University Press, Oxford.
- (2001), *Nationalism : Theory, Ideology, History*, Polity Press, Cambridge.
- Smith, A. D. & Hutchinson, J. (2000), *Nationalism : Critical Concepts in Political Science*, Vol. I-V, Routledge, London.
- Sieyes, E. (1789), *Qu'est-ce que le Tiers etat?*, Document électronique, Centre National de la Recherche Scientifique, http://galica.bnf.fr/Fonds_Textes/T_0089685.html, August 26, 2002 (大岩誠訳『第三階級とは何か』, 岩波文庫, 1950年).
- Taylor, Arthur J. (1972), *Laissez-faire and State Intervention in Nineteenth-century Britain*, Macmillan, London.
- Taylor, A. J. P. (1995 [1993]), *From Napoleon to the Second International ; Essays on Nineteenth-Century Europe*, Penguin Books, London.
- Weber, M. (1976 [1921-22]), *Wirtschaft und Gesellschaft : Grundriss der verstehenden Soziologie*, (Funfte, revidierte Auflage, besorgt von Johannes Winckelmann), J. C. B. Mohr, Tübingen (邦訳は, 清水幾多郎訳『社会学の基本概念』岩波文庫, 1972年 [Erster Teil, Kapitel I, pp.1-30], 世良晃志郎訳『支配の諸類型』創文社, 1970年 [Erster Teil, Kapitel III-IV, pp.122-180], 世良晃志郎訳『法社会学』創文社, 1974年 [Zweiter Teil, Kapitel I, pp.181-198, und Zweiter Teil, Kapitel VII, pp.387-513], 武藤一雄・蘭田宗人・蘭田坦訳『宗教社会学』創文社, 1976年 [Zweiter Teil, Kapitel V, pp.245-381], 世良晃志郎訳『支配の社会学 I, II』創文社, 1960-1932年 [Kapitel IX, 1 Abschnitt-6 Abschnitt, pp.541-726], 石尾芳久訳『国家社会学』法律文化社, 1992 [1960]年 [Zweiter Teil, Kapitel IX, 8. Abschnitt, pp.815-868] など).
- Young, C. (1976), *The Politics of Cultural Pluralism*, University of Wisconsin Press, Madison.
- Zernatto, G. (2000 [1944]), Nation : the history of a word, *Nationalism : Critical Concepts in Political Science*, Vol. I., edited by John Hutchinson and Anthony D. Smith, Routledge, London, pp.13-25.
- 色川大吉 (1995 [1977]) 「日本ナショナリズム論」『色川大吉著作集 第2巻 近代の思想』, 筑摩書房。
- 小熊英二 (1998) 『「日本人」の境界』新曜社。
- 加藤周一 (1975) 『日本文学史序説 上』, 筑摩書房。
- (1980) 『日本文学史序説 下』, 筑摩書房。
- (1979 [1955]) 「日本文化の雑種性」『加藤周一著作集 7』, 平凡社。
- (1979 [1957]) 「近代日本の文明史的位置」『加藤周一著作集 7』, 平凡社。
- 姜尚中 (1996) 『オリエンタリズムの彼方へ』岩波書店。
- (2001) 『ナショナリズム』岩波書店。
- 九鬼周造 (1967 [1930]) 『いきの構造』, 岩波書店。
- 杉原泰雄 (1971) 『国民主権の研究—フランス革命における国民主権の成立と構造』, 岩波書店。
- (1978) 『人民主権の史的展開—民衆の権力原理の成立と展開』, 岩波書店。
- スターリン (1952 [1913]) 「マルクス主義と民族問題」スターリン全集刊行会訳『スターリン全集 第2巻』, 大月書店。
- 孫文 (1957 [1930]) 『三民主義, 上・下』, 安藤彦太郎訳, 岩波文庫。
- 津田左右吉 (1977 [1916]) 『文学に現はれたる我が国民思想の研究 (一) ~ (二), 貴族文学の時代』, 岩波文庫。
- (1977 [1917]) 『文学に現はれたる我が国民思想の研究 (三) ~ (四), 武士文学の時代』, 岩波文庫。
- (1978 [1918~1921]) 『文学に現はれたる我が国民思想の研究 (五) ~ (八), 平民文学の時代』, 岩波文庫。
- (1938) 『支那思想と日本』岩波新書。

- 橋川文三 (1994 [1968]) 『ナショナリズム』, 紀伊国屋書店。
- 古矢旬 (2002) 『アメリカニズムー「普遍国家」のナショナリズム』, 東京大学出版会。
- 福田敏一 (1988) 『国家・民族・権力ー現代における自由を求めて』, 岩波書店
- 丸山真男 (1961) 『日本の思想』, 岩波新書。
- (1995 [1957]) 「ナショナリズム・軍国主義・ファシズム」『丸山真男集 第6巻』, 岩波書店。
- (1996 [1978]) 「思想史の方法を模索して」『丸山真男集 第10巻』, 岩波書店。
- (1996 [1979]) 「日本思想史における「古層」の問題」『丸山真男集 第11巻』, 岩波書店。
- (1998) 『丸山真男講義録 第七冊 日本政治思想史 1967』, 岩波書店。
- (1999) 『丸山真男講義録 第五冊 日本政治思想史 1965』, 岩波書店。
- 三宅雪嶺 (1989 [1975]) 「余輩国粹主義を唱道する 豈偶然ならんや」(「初期政論」), 『近代日本思想大系 5, 三宅雪嶺集』筑摩書房。
- 村岡典嗣 (1949) 『日本思想史研究, 第四』岩波書店。
- 村上重良 (1970) 『国家神道』岩波書店。
- 安丸良夫 (1992) 『近代天皇像の形成』, 岩波書店。
- 柳田國男 (1947) 『新國学談, 第三冊』小山書店。
- 矢部貞治 (1980 [1962]) 『政治・民族・国家の話』, 講談社学術文庫 (初出表題は『国家・民族・階級』今日の問題社)。
- 吉田裕 (2002) 『日本の軍隊ー兵士たちの近代史』, 岩波書店 (岩波新書)。
- 吉本隆明 (1964) 『現代日本思想体系第4巻, ナショナリズム』, 筑摩書房。
- 和辻哲郎 (1963 [1935]) 『風土ー人間学的考察』, 岩波書店。